
凍りついた雷

朧神無月朧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凍りついた雷

【Nコード】

N0670W

【作者名】

卍神無月卍

【あらすじ】

主人公藤原雷花は学校で廊下に立たされてたら異世界に落とされました、そして脇役の花梨も下校中に友達の目の前で異世界に落ちました。

そんな設定のトリップ物です。

できが悪いですがハハハこやつめと言える方にお勧めです。
処女作です。

自己紹介（前書き）

処女作なのでいたらないところがあるかもしれませんがで容赦してください。

ちなみにこの話のことは特に主人公は覚えてないハズです。

自己紹介

・
・
・
・

・
・
・

・
・

・

・

なんて振ってみたものの特になんでもなかったりする俺
とりあえず自己紹介。

俺の名前は藤原雷華（ふじわら らいか）

よく女みたいな名前って言われるけど男だ。

ちゃんといってる・・・はずだ

正直な話作者は適当だから後付け設定満載になると思う。

そこらへんは了解して欲しい。

ちなみに今のところ兄弟とかの設定もないけど作者のことだから後
付けで入れてくるはず。

髪の色と眼の色はともに黒、作者の後付けがなければこのままで行
くと思うんだ。

作者を一方的に痛めつけているようだが作者は割と気さくな暇人な
ので余裕で流すと思う。

実際作者は車に轢かれても自転車から落ちることはなかったらしい。

（実は右足痛くなった。）

ちなみにクラスメイトに割と仲の言い女子がいてそいつの名前が

龍堂花梨（りんどう　かりん）

っていう名前で作者曰くあと後活躍しそうな友達出した方が人気で
そうと言う理由でつくったキャラ

だったりするんだが特にどうでもいいらしい（作者曰く）

ヒロインではない、って作者が言ってた。

でも、髪の色が赤で（染めているらしい）眼の色が右眼が赤で左眼
が黒なんだが昔ぶつけて眼が赤くなったらしい。

作者はこいつを利用したいらしいな。

きっと俺の隣にいるヒロインになると思う。

正直な話こいつを恋人にって言うのは少し無理がある気がする。

だって素手なら俺より強いんだぜ？

ちなみに俺が武器持ちでも素手のこいつに勝てる気がしない。

こいつ俺の目の前にいたら後ろに回り込んで手刀で延髄に衝撃与え
てきたり手刀で衝撃波飛ばしてくるんだぜ？

こいつに勝てる奴いんのか？

いるなら見てみたいな。

ほかにもいろんな人外が周りにいるが作者はそういうの全部出して
ガチガチに固めるのは好きじゃないらしいんで取っておくらしい。

作者は俺達をすでに固めてる癖に何がしたいんだろうな？

ちなみにおれは極々普通の高校生（のハズ）だ。

少なくとも龍堂とは絶対に違うタイプの異常であることを願う。

あいつと一緒にいて喧嘩したりしてる時点でアウトな気がしなくも
ないが。

だが少なくとも衝撃波は飛ばせないし瞬間移動はできない。

そこまで人間やめてないつもりだ・・・きつと

作者は文字書くのめんどくさいから900超えたあたりで限界らし
い。

作者弱いな・・・

自己紹介（後書き）

作者は暇人なので物語にキャラクターとして混ざります。
おもにモブ方面で。

ブログっばい（前書き）

作者はその時の気分で書くので下書きとかは全くありません。

思いついたことをノリでつづるだけですなので設定の矛盾や出すだけ出してフラグ回収も忘れるかもしれません。

ていうかフラグだと言う事も気づかないかもしれません。

後盛大に他人のネタバレくるかもしれません。

自分で読んで改めてひどいと思った・・・

プロローグっぽい

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

・・・作者この演出好きだな。

とりあえず俺の名前は藤原雷花女みたいって言われる・

言った奴らはそれなりに話をしておいたから女扱いはい片手で数えられる程度だ。

ただし一人分のは言っていない。

「雷花は誰に向かって言ってるの？」

こいつは龍堂花梨、右眼が綺麗な紅色だと思う。

「・・・？」

こいつはこう見えても人外である。

別に人間じゃないとかじゃなく身体能力が人外クラスだったりする。こつちを不思議そうに見てくる顔は割と整ってる方だと思う。

こんな顔してどこにあんな力が・・・

「・・・いい加減答えようよ」

しびれを切らしたようだ。

「別にそうじゃないよ？」

どうやら違うようだ、ん？

「人の心読むなし」

なぜか人の心を読んできた。

「顔に書いてあるよ？」

え、正直な話本当に顔に思っていることが書いてある奴がいたら見てみたい。

「で、誰に言ってたの？答えてくれないともう私の精神が・・・」

泣きそうな顔になった。

・・・虐めたいと思った俺は異常か？

「いや、別に誰とも話してないし何も言ったつもりはないが？」

「ちなみに虐めたいっていうのは異常だよ。」

だから人の心を読むなと・・・

こいつは本当に人間なのか疑わしくなってきた。

「で、何でおれの家にわざわざやってきてん？」

そう、今更だがここは俺の家である。

花梨が俺の家にいることがおかしいのだ。

「えっ・・・それは迎えでしょ。」

「俺の部屋にか？」

そう、ここは俺の部屋である。

今更（ry

「えっ・・・それは（ry」

似たようなことを繰り返すなこいつは・・・

「いや、向かえってのは玄関で待ってるよ」

俺の中だと玄関待ちが定番なんだけど普通はどうなんだろうね？（

作者談）

「いやさ、そこはあれだよ、常識を打ち破るんだよ。」

こいつは、新しいルールを作りだそうとしてるらしい。

「いや、違うよ？」

違うらしい、そしてまた心を読んでくる。

「だから顔に書いてあるんだって、鏡見てみなよ。」

「え、マジでか。」

ちよつと本気で心配になった。

「うん、嘘」

鏡の前に立ったおれにかけられた言葉がこれである。

こいつ・・・うぜえ

「で、学校遅刻しちゃうけどいいのかな？」

「いや、困るだろ普通。」

うん、何を言い出すんだこいつは。

「え、雷花って普通だったけ？」

・・・改めてうぜえ

「・・・なあ、」

「ん？」

…こいつわかってんのか？

「何ですつとこの部屋いんの？」

「え、だから迎えて」

あ、こいつ本気で解ってないな。

「着替えたいんだけど見られたくないんだが・・・」

そう、着替えたいのにずつとこっち見てるのである。

こっちみんな。

「あ、そういうことが、先に言ってくれないと困っちゃうよ。」

こいつは・・・悪びれもせずよくそこまで言い切れるものだ。

「じゃ、外で待ってるね。」

出てったな。

とりあえず着替える俺。

着替え終わったおれは階段を下りた。

なんとその先には！

花梨がうちの台所で俺の朝飯であろうものを食べてた。

「え？」

「え？」

返された。

「いや、お前の食べてる飯誰の？」

「ン、私のに決まってるでしょ。」

じゃあ俺の飯はあるんだな。

「元雷花のご飯だけど。」

ないんだな、わかった。

「とりあえず返せ。」

「残念！食べ終わりました！（どや顔）」

・・・こいつ本当にうぜえ

朝飯が食えなかったおれはとりあえず食パンを加えて登校。  
結局花梨は俺を置いて出てった。

あいつ結局おれの家で飯食っただけじゃねえか・・・

「私がただ食べるだけだと思った!？」

曲がり角から出てきた。

今更だけどなんでこんなにテンション高いんだろう・・・

俺には理解できないな

「じゃあ何しに来たんだよ」

「迎えだつて何回言わせる気？」

所で思っただが迎えつてのは勝手に人の朝飯を食うものか？

「あ、あのさ！そ、そうだよ！犬歯つて触ると痛そうだよね！」

どういふ話のそらし方だよ・・・

あ、でも確かにいたそう。

「ね？」

アニメなら　が出そうなほどのウイंकをしてくる花梨

「で、何で人の朝飯食ったんだ？」

「あ、くそ、逸らせなかった」

やっぱり逸らしたかったようだ。

こいつわかりやすいな・・・

「今解りやすいつて思っただでしょう？」

こいつはさとり妖怪か。

「私のこの灼眼の前では隠し事は無意味よ！」

今まで朱色の眼で人の心を読んでいたらしい。

「嘘だけど。」

嘘だったらしい、こいつ本当につかめねえ・・・

「胸のこと？何？もしかして喧嘩売ってる？」

「違うぞ、そして人の心を読むな、確かにお前の胸は小さいがつかめないほどではない。」

「やっぱり小さいと思ってたんだね、解った戦争だ。」

気にしてたんだな・・・とりあえず逸らすか。

「学校に遅刻するぞ。」

確かおれは登校中のはずだ。

「大丈夫、もう八時半すぎてるから。」

手遅れだったようだ。

「なおさらまずくないか？」

こいつは時間を気にしなさすぎる。

「大丈夫だよ、一撃で決める。」

恐ろしいセリフが聞こえた気がするが聞こえない。

とりあえず何事もなく学校に俺たちは二人揃って廊下に立たされた。作者は実際に廊下に立たされた人を見たことがあるらしい。

現実ではレアだと思う。

「ほらあ、雷花の心配してたほどのことは起きなかったでしょ。」

俺としては廊下に立たされる時点で驚きだがな、人生初だよ、廊下に立たされるの。

「あ、雷花、足元気をつけて。」

「ん？」

俺の足元には黒い円があった、濡れ羽色っていうのか？  
ものすごくきれいな黒だった。

## ブローグっばい（後書き）

はい、どうも、神無月です。

どうやってトリップさせるのか本気で悩んで紅髪灼眼の花梨の目の前で黒い円が出るって所でやめました。

理由としては2000字打つだけで作者は死にかけるから・・・

作者は長い文を打つのは苦手なのでこんなペースで行きます。

素晴らしいことに落ちてった。  
(前書き)

作者は優柔不断だったりします。  
最近雨多い気がする作者の地元

素晴らしいことに落ちてった。

S i d e 花梨

私は今日も今日で暇だ。

学校の授業は座ってるだけで終わるしこれと言って親しい友達もない。

一人いることはいるが男だしどちらかと言えば幼馴染である。

で、珍しく朝早くに起きた私はしっかりと朝ご飯を食べて（ここ重要）その親しい友人の雷花の家に迎え（遊び）に行った。

正直な話本気で走れば30秒ほどで雷花の家につけるがそんなことして変なのに目をつけられる気もないので普通に歩いて雷花の家に行く。

雷花の家は私の家から割と近い（作者は最寄りの知り合いの家でも2kmほど離れてました）。

普通に歩いていけば5分程度だ。

とりあえずいつものように雷花の家の鍵のかけない扉をあける。

セキュリティとかどうでもいいのかな、この家・・・

いつものように自分の部屋で寝てると思い部屋へ直行。なおよき

？

なぜか話し声が聞こえる、雷花の家にこんな時間に来るような人は私くらいしかいなかったはず。

不思議に思った私はとりあえず音を立てずに部屋に潜入

何やら自分の名前が女見たいという事を独り言でいつている。

声をかけてみる。

「雷花は誰に向かって言ってるの？」

本当に気付かなかったようでビクツとした、ちょっとかわいい。

答えない。

「・・・？」

とりあえず沈黙で問いかける。

待つ、待つ、待つ・・・  
答えない。

「・・・いい加減答えようよ」

しびれを切らした私

しびれを切らしたのを見破られた感じがしたのでとりあえず聞いてみる。

「別にそうじゃないよ？」

・・・予想は当たったようだ。

「人の心読むなし。」

とりあえず常套句を言う。

「顔に書いてあるよ？」

うん、完璧。

とりあえず答えてもらいたい。

「で、誰に言っただの？答えてくれないと私の精神が・・・」  
泣きそうな顔を試みる。

私がこの顔をするって決まって虐めたくなるらしいので回答を用意する。

「いや、別に誰とも話してないし何も言っただけじゃないが？」

これは嘘をついている！と思う。

「ちなみに虐めたいって言うのは異常だよ。」

うん、完璧な受け答え。

「で、何でおれの家にわざわざやってきてん？」

今更なのか・・・

とりあえず誤魔化す。

「えっ・・・それは迎えでしょ。」

「俺の部屋にか？」

うん、そこは私もおかしいと思うよ。

とりあえず同じ答えを返す。

「えっ...それは迎えでしょ？」

うん、語尾をかえることでおかしくないと思わせる、我ながら完璧。

「いや、迎えてるのは玄関で待ってるよ」

正論を返された。

ならば正論を捨てる。

「いやさ、そこはあれだよ、常識を打ち破るんだよ。」

私がルールだ！

向こうも同じ考えに至ったらしい

「いや、違うよ？」

うん、心を読むのが常識見なくなってきたな私。

「だから顔に書いてあるんだって、鏡見てみなよ。」

振ってみる。

「え、マジでか。」

本気で信じたらしい。

笑いをこらえながら答える

「うん、嘘」

きつとこつちのことわざだと思うてる、私も我ながらつざいと思っ  
た。

本来の目的を思い出した私。

「で、学校遅刻しちゃうけどいいのかな？」

「いや、困るだろ普通。」

だよネ、普通なら困るよね、普通なら。

「え、雷花って普通だったっけ？」

雷花は普通じゃないと思うんだ、独り言とかいうし。

「・・・なあ、」

話しかけられた。

なに話しかけてきてるわけ？なんて答えようとしたがなんかまずい  
んで当たり障りない答えを返す。

「ん？」

これが一番返答でメジャーだと思う。

「何ですつとこの部屋いんの？」

え？何言ってるのこの子はさっきから言ってるのに、

「え、だから迎えって」

とりあえず視線で何を言ってるのこいつはって向けてみる。  
なんでずっとベッドにいるんだろ？

「着替えたいんだけど見られたくないんだが・・・」

ああ、そういうことが、

本気で解ってなかったよ。

「あ、そういうことが、先に言ってくれないと困っちゃうよ。」

うん、本当に先に言ってもらいたいものだね。

何だこいつって目で見られた・・・

「じゃ、外で待ってるね。」

この場合の外とは部屋の外である。

とりあえず台所へ行く。

・・・おいしそうなご飯だ。

私は雷花のものであるうご飯を食べ始めた。

冒頭でも言ってるが私はすでに朝食食べている。

おいしそうなご飯が悪いのだ。

雷花が階段を下りる音が聞こえる。

そしてこっちに來たとたん

「え？」

いきなりこう言った。

「え？」

いきなりなんだろう。

「いや、お前の食べてる飯誰の？」

あ、まずい・・・

とりあえず

「ん、私のに決まってるでしょ。」

雷花はとたんに安心したような顔になった。

とりあえず絶望に落とそう。

「元雷花のご飯だけど。」

急に落胆した。

「とりあえず返せ。」

雷花は意味わかってるんだろうか？

それって間接キスじゃ・・・

はっ、こういう時は！

「残念！食べ終わりました！（どや顔）」

これだ！

これ以上は雷花が起こりそうなので先に行く。

そして、曲がり角で待機。

食パン啜えて出てきたよ・・・

「私がただ食べるだけだと思った！？」

あ、今うざいつて思ったな、多分

「じゃあ何しに来たんだよ」

迎えだね。

「迎えだつて何回言わせる気？」

あ、ご飯のこと根に持つてる見たな顔（どんな顔だ）

あ、そういえばこの前<sup>すみれ</sup>董が言ってた！

「あ、あのさ！そ、そうだよ！犬歯って触ると痛そうだよね！」

どういう逸らし方だろ・・・私も一瞬意味わかんなくなった。

あ、理解してくれた、すごい脳内だな雷花

「ね？」

とりあえず渾身のウイंकを発動する。

「で、何で人の朝飯食ったんだ？」

・・・逸らせなかった、だと？

「あ、くそ、逸らせなかった」

「今解りやすいって思ったでしょう。」

妖怪だと思ってるだろうね・・・

「私の灼眼の前では隠し事は無意味よ！」

今更だけど私は右眼が深紅に染まっている。

私は綺麗だと思っけど周りの人はそう思えないみたい。

雷花は綺麗だと持ってくれてるらしい。

あ、本当に信じたね。

「嘘だけど。」

・・・うん？失礼なこと思ってるなこいつ

「胸のこと？何？もしかして喧嘩売ってる？」

うん、まだまだ成長するし成長しなくても小さい胸が好きな人もいるから大丈夫だって。

「違うぞ、そして人の心を読むな、確かにお前の胸は小さいがつかめないほどではない。」

私の胸をつかんだこともないくせに言いきった・・・そして小さいか・・・

「やっぱり小さいと思ってたんだね、わかった戦争だ。」

多分私一人でチンプイくらいなら5人同時に相手にしても勝てる。雷花なら3人くらいまでいけそうな気がする。

ちなみに3m以内なら一瞬で移動できる私が一般人ごときに後れをとるはずがない

「学校に遅刻するぞ。」

え、今更？

「大丈夫もう八時半過ぎてるから。」

そう、もう遅刻決定である

「なおさらまずくないか？」

私の場合は遅れたらもうあきらめるんだけど雷花は遅れても急いだ方がいらしい。

じゃあ速攻で終わらせるか。

「大丈夫だよ、一撃で決める。」

うん、今の私なら光さえ超えることができそう。

雷花がファイティングポーズをとった瞬間に後ろに回り込むくらいならできる。

結局喧嘩はしなかったけど遅刻はした。

二人揃って廊下に立たされちゃったよ。

廊下に立たされるってレアだと思うけどバケツ持って立たされるの

はもつとレアだよね。

作者はバケツ持ちは見たことないらしい。

「ほらあ、雷花の心配してたほどのことは起きなかったでしょ。」

うん、こうでも降らないと後で喧嘩になっちゃう。

雷花は廊下に立たされたことが嫌らしい、私も嫌だけどさ。

「あ、雷花、足元氣をつけて。」

今思うとなんて馬鹿な発言だろう・・・

「ん？」

雷花の足元には真っ黒な円があつた、漆黒の円かゝ

私の厨二度が加速していく・・・

そんな事を思つてたら雷花が円っていうか穴に落ちてつた。

どこに繋がってるんだろうね？

うん、私のリアクション薄い。

素晴らしいことに落ちてった。(後書き)

はい、どうも作者です。

飽きっぽい私はもっと文字数増やせないかとかんばって3000文字で投稿しました、作者の指はプルプルしてます。

## 紅って綺麗（前書き）

作者は書いていて思った。

作者っていうより筆者の方がいいんじゃないかと。

というかそもそも話筆者が読み返してみたあたり主人公である雷花よりもヒロインではないはずの花梨の方が出番多いうえに活躍してる気がする。

これが伏線だったのか！

## 紅って綺麗

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

あ、また私なんだ。  
どうも花梨です。

私の目の前で雷花が無様に落ちて行ったのをひとしきり笑った後よく考えたらまずいんじゃないかと思い始めました。  
なんで敬語なのかというと筆者の気分です。

筆者はその時の気分が変わるんですね・・・

筆者の気分には左右される小説ってどうなんだろ。

「あれ？藤原はどこ行った？」

あ、先生来た。

「龍堂、お前は何か知らないか？」

あ…やっぱりそうなるか

「トイレとかいってどっか行きました。」

とりあえずこれでだませるはず。

「・・・藤原のことだから昼食の時間には帰ってくるだろう。」

先生・・・雷花のことどうでもよさそうな扱い・・・

「あ、もう教室に戻っていいぞ。」

解放されたよ！

とりあえず私がまずやることは弁当を食べることだね！

1時限目が終わったところです。

「ねえ、花梨」

誰？私の至福の時を邪魔する人は？

「あ、董か」

なんだ、董か・・・

変な人だったらどうしようかと・・・

まあ、学校に変な人は来ないわけですけど。

「で、何用？」

いきなり話しかけてくるなんて一体何の用だろう・・・

「花梨つて雷花君と付き合ってるの？」

ブツ↑盛大に弁当吹き出した音

スツ↑董が避けた音

ビチャツ↑クラスメイトにかかった音

あ、ついちゃった・・・

「うわっ、汚ねっ！」

男子生徒怒ってるよ・・・

「お前か花梨！」

うん、そりゃ一時限目から弁当食べてるの私しかないよ。

「俺この後の授業どうすりゃいいんだよ!？」

あ、コマツタネー

「私の制服でも着る？」

「それはないな。」

董とそろって言われちゃったよ・・・

「おいイ？俺の服汚しておいてお前の服を着ろ？お前それでいいのか？」

うん、まったくかまわないけど・・・なんでブロント語？

こういう人つてモブ率高いか逆に主役クラスになっちゃうんだよね・

・

「ところでこの男子は何を言ってるの？」

あゝ、董には解らなかったか・・・

「俺のネタを解らないやつに想像を絶する悲しみが神無月を襲った

!」

あ、これ作者だ。

じゃあ、モブ路線か。

「とりあえず保健室にはジャージがあると思うけど制服って言う時点で職員室に行けばあると思うよ。」

うん・・・プロ語使いにくい・・・

「ふむ、かrrんの言うことも解らなくはにいがお前はそれでいいのかよ？」

「大丈夫だ、問題ない」

完 全 論 破！

うん、作者は何がしたいんだろ・・・

だんだん発音がおかしくなってきたよ？

「お前あんまり調子乗ってる病院で栄養食を食べるハメになるぞ？」

え、私調子に乗ってた？

「私はまじめにやってるが別にどこもおかしくないな。」

あ、董わけわからなくなつてどっか行つた。

筆者はなんかやりきつた顔してるし・・・

「俺はよお、制服を汚されたから文句を言っただけだよ・・・これなら別に汚されたのも許せるなと思っただよ。」

あ、許してくれた。

「クリーニング代さえ払ってくればな。」

あ、ちゃんと要求した。

「え、何いきなり代金要求してるわけ？」

うん、私の発言にどこもおかしくないな。

「お前あんまり調子乗ってる裏世界でひっそり幕を閉じることになるから気をつけろよ。クリーニング代は900円でいい。」

あ、割と高いんだか安いんだかわからない値段提示してきた。私今いくら持つてるかな・・・

「はい、900円。」

うん、あつた。

「俺は冗談で言っただが本気で900円くれたよ。」  
あ、こいつなんかやだ。

筆者か、筆者はこんな性格なのか。

そういえば筆者は昔コンビ二によったら後ろから来た車にはね飛ばされたことがあるって言うってた、筆者は体が丈夫なんだね。

「じゃあ、俺はこのまま早退するから。」

あ、帰るんだ、筆者は実際に1時限目で早退したことはないけどHRで帰ったことならあるって言うってた。何があっただろう・・・あ、董帰ってきた。

「で、話の続きなんだけど。」

あ、やっぱりそうなるんだ。

「ンンンンンンン！」

「え、何？」

口に食べ物入ってるだけです。

とりあえず飲み込む。

「じゃあ、弁当はあとでいいや、で、さっきの質問の答えだけどNOだよ」

うん、どっちかっていうと幼馴染とか悪友とかそんな感じだし。

「じゃあ、どんな関係なの？朝迎えに行ったりしてるみたいだけど。」

「

そりゃあ、まあ、

「喧嘩仲間」

間違っではないいなね。

「え、花梨と喧嘩できるの？」

そう、これでも私のスペックは高い。

なんで胸に行かないんだろう・・・

「それってどういう意味さ？」

「いや、だって花梨手振るだけで衝撃波飛ばすわ瞬間移動するわ、こいつ人間？って思うくらい動きするじゃん。」

いや、まあ、そうなんですけどね？

そもそも筆者は私を気に入ってるのかな？

人外設定ばかりつき込んで捨<sup>モブ</sup>キャラとかいやだよ？

それに見た目も紅髪灼眼（ただし右目に限る）っていう見た目だし・

魔法使いとかだったら火属性だよね。

私は魔法なんかより身体で戦った方がいいけど。

いや、両立させられるからこそ強いのか？

あ、これは私ラスボスポジションに行くかもしれない。

「人間じゃないとは失礼な！」

うん、これだけは言える、私は人間のはず。

「俺はさあ、暇人なんだよ、だから早退って言っても誰も何も言わないから悲しくなりましあ；」

あ、筆者まだいたんだ。

健気だねえ・・・

さて、じゃあ・・・

「筆者の都合によりカット」

あ・・・

「今日もよく勉強した」

うん、筆者ありがとう、私話し続けられなかったわ。

「ねえ、花梨。」

ん、また来たか。

堇もしつこいねえ・・・

「花梨はさ、頑張ったって言うけど小テスト何点だった？」

あ、そんなのあったね、キングクリムゾンしてたから忘れてた。

「え」と、ちよつと待って、探す。」

とりあえず鞆を探る。

「あ、あった、・・・28点。」

うん、我ながら低いね。

私は困難で卒業できるだろうか・・・

「よくそれで頑張ったって言えたなあんだ。」

堇のツツコミが痛い・・・

「じゃあ、堇は何点？」

そう、なら何点だ！？

「あ、私？98点。」

ちくしょおおおおおお！！！！

「俺は小テスト100点だがどこもおかしくないな。」

あ、筆者来た

「この会話に混ざることがおかしいよ。」

董・・・正直者だね。モブなのに

「私がモブだなんて誰が言った！」

「では、言おう！お前はモブだ！」

あ、筆者の宣言。

「私が・・・モブ？」

うわ、なんか幽鬼みたいになった

そういえばフルネームが出てこないキャラだね、董

筆者はキャラ名をSkypeの知り合いと話し合っ<sup>て</sup>決めています。

確か早乙芽董<sup>さおとめ すみれ</sup>だったはず。

筆者は知り合いと話が弾んで董の弟まで作ってたよ。

名前忘れたけど。

後はヒロインの名前も・・・

ヒサメ？キリサメ？だったかな？ とりあえずばかりしています。

「俺はよう、Skypeの連絡先もってるユーザー9人しかいないぜ！」

筆者は知り合いが少ないそうです。

まあ、筆者ならしょうがない。

「神無月はなんでこっちきてんの？そして地味に満点とは生意気な。」

筆者は満点なんて殆どありません、ていうかないね。

「生意気かどうかは置いといてお前らの話に終止符を打ちに来た。」  
筆者は打つのつかれたらしいです。

「この話は筆者の権限においてここで終わらせ「ないけどね？」む。

」

せめて3000字は超えたい 筆者談

その時私の足元にも円ができた。

ただし、その色は私の瞳と同じ真っ赤だった・・・

「え、ちょ、うわ、落ちる。」

私は私でどういうコメントだよ・・・

「ほうら、お前の出番はここで打ち止めになった。」

まただよ（笑）

ブロ語好きだね。

その時私の視界は真っ赤に染まった。

## 紅って綺麗（後書き）

はい、筆者です。

ようやく自分出せたよ！

テンションは異常だねこの筆者。

一応イメージとしてはブロ語を使う筆者です。

書いてきた文字数から視点確認。

雷花、3000文字

花梨、5000文字

・・・花梨大活躍！

筆者の腕不足ですね、はい

ようやく出番が！（前書き）

はい、筆者です。

出番が無いことに定評がある主人公の登場ですね。  
今度は花梨の出番がなくなるだろうな・・・

ようやく出番が！

のののの

ののの

ののの

のの

の

・・・前衛的だな

筆者のせいで出番がまったくと言っていいほどなかった雷花です。

オボエテルカナー？

筆者は本気で忘れてました。（実話）

そんな俺はなぜか真つ暗な部屋にいます。

ここどこよ・・・

筆者は雷花を書くモチベーションが上がらないという不思議な現象が生じます。

道中を投げ飛ばしました。

あ、なんか人来た。

「O senhor ? o homem valente de sta gera??o?」

うん、何言ってるかわかんね。

何語なんだろ・・・

「あゝ・・・言葉わかりません」

向こうは言葉通じんのかね？

「あ、日本語でしたか。」

え、何この万能な人

こういうのって言葉通じなくて何か魔法的な使っんじゃない？

「え、何で言葉話せるかわかんないけど通じるならそれはそれでいいや。」

うん、デメリットにはならないはず。

「ちなみに日本語が話せるのは私だけです。」

まあ、最初のが母国語だろうねえ……

……話し続かねえ（筆者談）

「まあ、日本語がどうのこうのってのはいいから俺は侵略とか言う癖にずっと魔王城に居座る魔王？それとも魔王を討伐する勇者？」

うん、これがお決まりのはず、召喚？されていざ！ってのに一般人とか気が抜ける。

「あ、貴方は勇者ですね、昔似たような質問してきた人がいたんですがそれが定石なんでしょうかね？」

所謂テンプレだよねえ……トリップはさあ……

「昔つてのがどれぐらい前かは知らんけどせめてこの世界の状態を聞かせてほしい。」

うん、これもテンプレであるはず。

「いたって平和です。」

え？

今何て言ったよこの人、つまり意味なく呼ばれたのか……

「嘘ですよ、意味なく呼ぶなんて魔力の無駄でしかありませんし。」

こいつ花梨みたいなやつだ……

でも、よかった。

意味もなく呼ばれて帰る方法がないとかかなしすぎる。

「じゃあ、何用なんだろう？」

ふむ、謎だ。

「まあ、貴方自身が言ってた魔王討伐ですね、がんばってください。」

「

某竜の物語は少なくとも金はくれたはずだよね、何でこんな正直誰だかわからない人に送り出されないといけないんだろ？

「あ、私はこれでも王女です。」

王女だって、テンプレだと巫女さんとか魔法使いなのに王女だって、女王と王女の違いわかんないけど、王女って娘だよな？確か

「なにかしらください」

装備欲しいぜ！

「先代が城の装備と兵力を殆ど持って行ってしまいました・・・」

先代エ・・・

先代って何かしらしてるはずだよネそれ・・・

「先代はそのまま他国に亡命したとか」

先代仕事しろ、せめて功績のこせや

「兵士どうしたんですか？」

「そのまま先代が他国に売り渡しました。」

先代最低だな、おい

「ちなみに我が国は今その国と戦争してます。」

「え、勝てるの？」

兵力もつてったんでしょ？

勝てんの？

「そこは大丈夫でした。」

でした？ed？過去形？

「じゃあ、今は？」

「もう負けそうです。」

うわぁ・・・嫌なタイミングで呼ばれたなぁ・・・

「ちなみに魔王討伐の前に戦争を終結させてください、このままだと魔王ではなく敵国にこの国はやられてしまいます。」

うわぁ、大変だ・・・

正直国の争いとかかわりあいたくないんだよねえ・・・

「せめて戦い方を教えてください。」

「簡単な魔法くらいなら城の書物庫から・・・」

え、それはどういう意味なんだろう・・・

「先代が魔法使える人をあらかじめ持って行ったので・・・」

あ、先代最低すぎる。

「書物庫に案内してください。」

「それくらいなら」

「しかし日本語ペラペラですね。」

無駄にうまくないか？

「それでも私は長寿である龍人族なので、歴代の勇者から日本語を教わりました。」

あゝ、テンプレなのか・・・

しかし勇者歴代で・・・帰れなかったのか？

まあ、割と多いからしょうがないさ・・・

「書物庫はこちらになります。」

俺のいた部屋出てすぐ左だったよ・・・

「貴方の得意魔法を調べる方法は私には解りませんので適当に頑張ってください。」

うん、ここまで投げられるとは思わなかったよ。

「先代には？」

「先代は水属性が得意でした。」

水・・・ねえ

「せめて属性だけは知っておきたいんだけど・・・」

水だといくつか属性パターンあるしな

「七曜です。」

一週間でいいのかね？

「木火土金水の５種類に時間と空間ですね。」

割とあるね。

「魔法は組み合わせで大体たくさんあります。」

そうなんだ・・・

「私はここまでしか知りません・・・」

まあ、属性さえ分かればいいや。

「じゃあ、書物庫のお世話になるから王女様は自分の仕事に戻った方がいいんじゃないかな？」

まあ、あんまりかまつてられないよね。

「あ、私にはたくさんの兄弟がいます。」

え？だから？

「仕事なんてありません。」

あれか、ニート姫か。

俺は黒髪のロングストレート以外はニート姫と認めない、この人黒髪だけだ

「扱える魔法は？」

うん、そういえば聞いてなかった。

「簡単な時属性の魔法なら・・・」

時ねえ・・・永遠と須臾だっけ？ニート姫

あれ、こいついい感じかもしれない。

「あのさあ、髪のはしてくれる？」

あ、言っちゃったよ・・・

「・・・それ言う人これまで何人いたでしょうが・・・」

あ、遠い目し始めた・・・

歴代みんな似たような思考回路してるんだね。

## ようやく出番が！（後書き）

筆者です。

このままだとどこまでも一直線に行きそうなのでここで切りました。  
筆者の書く能力の低さが疑われるね。

ちなみに王女のイメージはぐーやです月の姫様です。

時属性は狙いました。

ちなみに時間と空間は上位なんだろうなあ・・・と思う筆者

毎日網渡りしながら連載してます。

毎日ここで考えながら投稿。

次話は雷花がとんでもない壁にぶつかります。

まあ、常識ですね

きゃらくたあしょうかい(前書き)

ひらがなのがミソだと思う。

きゃらくたあしょうかい

ふじわらいか  
藤原雷花

筆者をいじめるのが大好きな子

筆者はこの子のせいで心が痛みます。

廊下に立たされてたら黒い穴に落ちてった

現在ぐーやみたいな王女と書物庫にいるみたい

勇者様

黒髪黒眼で身長は175cmで割と高い方だと思っ

高校一年生

りんどうかりん  
龍堂花梨

筆者（が）大好き

紅髪灼眼（右目）左目は黒い

性格も割と黒い

貧乳（ここ重要）

身体能力が人外

背は割と低い方155cmくらい

1時限目終わると弁当を食べる。

現在下校中に赤い穴に落ちて行つた。

かなづき  
筆者

ブロ語大好き

すみれ  
董

知り合いと話し合つて名前決めたモブ

割と頭いい。

## きやらくたあしょうかい（後書き）

皆大好き？

花梨ちゃんはそのなに設定きめてなくて一回限りのモブのつもりでした。

出番的には主人公が落ちるのを観る目撃者みたいな。  
なぜかこんなにも出番が。。。

## ぐーやとらいか（前書き）

ふおおおおおおおお

テンションが異常なことに定評がある神無月です。

最近受験生だったり、宿題やってなかったり、夏休み今日で終わりだったり過労死しました。

ぐーやとらいか

さて、俺だ、激しく疲れている。

理由は書物庫においてある書物の量が多いことと

書いてある文字が読めないことである・・・

あれ、積んでね？

そんなおれは言葉を学んでいるところである。

基本的には英語と大差ないような感じ

そういえばここは和の国（自称）らしい。

和の国に髪色が緑やらがいるのはどうなんだろうな？

緑・・・遺伝子的にはあり得ないとされている色らしい。

魔法の影響で色が変化しているらしい・・・

俺は書物に書いてある文字を覚えるためにせつせと文字を習得している。

言語学とかわかんねえよ・・・

俺の得点は中の上くらいである。

つまり、覚えにくい。

この国の識字率は日本並だそうなので覚えないと困る。

何が困るって文字が読めないと周りから変な目で見られるからだ。

周りから変な目で見られるからだ（大事なことなので二回言いました。）

正直な話識字率高いってことは教養はイイってことだよな？

何で戦争なんかしてるんだろ？

そこら辺は聞かないでおこう

S i d e . めーや（仮）

驚いた。

これまでと似たような問答をただけでなく私のことを恐れもせず  
に働けといってくることに。

確かに私は働いているよりはダラダラしてる方が好きだが初対面で  
当てられたのは初めてだ。

確かに歴代の少数は私に働けと言ってきたが少なくとも初対面では  
ない。

人を見る目があるのか、私がわかりやすいのか・・・

不敬罪<sup>じば</sup>のことを知らないのだろうか？

・・・少なくとも私がわかりやすいはずはない！

多分。

今代の勇者はいきなり戦うことをせずに魔法を使いたがった。

魔法に興味でもあったのか？

私にはわからないことだらけだ。

目の前の現実には驚くことしかできない。

目の前は悲惨な姿になった庭が・・・

S i d e . 雷花

割とこの世界の共通語らしい言語を習得出来始めてきた

で、魔法を漸く一つ習得出来たんだが・・・

「なんだよこれ・・・」

目の前が丸焦げだよ！

なんだか知らないけど

自分の得意属性を調べる、みたいな本に書いてあった呪文を唱えたら

雷が落ちてきました。

うわーい、目の前が真っ黒だー

現実逃避はいけないって昔おばあちゃんが言ってた。

電気？なのかね？

あれ、電気属性なんてあったか？

・・・組み合わせがあるって言うってたしいのか？

S i d e ・ ぐーや

雷・・・って何でしょう。

始めてみました。

電気・・・

冬に起きますし氷派生？なわけないか・・・

氷自体珍しい派生ですし・・・

電気・・・

存在自体知りませんでした

宮廷魔導士の人なら知ってるんでしょうかね？

結果、先代がみんな連れて行きました。

S i d e . 雷花

レアだったらしい

雷ねえ・・・

・・・これじゃ呪文わかんない

得意なだけか・・・

「得意魔法じゃなくても魔法は使えることは使えるんですよね？」

「はい、使えますよ。」

ぐーやが言うには得意な方が威力高かったりするらしい」

「ぐーや？」

あ、声に出てた

「私の名前は・・・ぐーやではなくレウコスペルムム・コルディフ  
オリウムです。」

名前長ッ！

## ぐーやとらいか（後書き）

あれー、予約投稿したはずなのに投稿されてないな　とか思ってたら  
予約じゃなくて速攻で掲載されました。

orz・・・

昨日更新されてないんだねつまり。

少なくとも5人くらいはいるであろう読者のみなさんすいません。

番外編「筆者が凍雷をかくまで。」（前書き）

筆者は最近MUGENにはまっています。

アドチル12Pでプレート氏の幻月に挑んでみたり。

番外編「筆者が凍雷をかくまで。」

S k y p eでの会話ログ

神無月「暇〜、なんか面白そうなことない？」

知り合い1「宿題しろ。」

また別の知り合い

神無月「暇〜、なんか面白そうなことない？」

知り合い2「宿題は？」

神無月「触ってないよ。」 当時8月20日くらい

知り合いB「やれよ。」

さらに別の知り合い

神無月「暇。」

知り合いC「小説でも書け。」

それだ

とりあえず以前やった植物の漢字の読みを当てるゲームを参考にキ  
ャラ名を設定

花梨かりんがそれですね。

あとぐーやもそれに当てはまるのかな。

藤原雷花君ふじわらいかなんかも藤あたりがそれですね。

藤は簡単すぎるだろう・・・

藤原になった理由はたまたま妹紅の同人見てたから

雷花はとりあえず花入れて属性も入れとこうと。

氷属性も名前だけでできましたが、レアだそうですね。

一応ヒロイン予定です。

以前ぼかしたヒサメ？キリサメ？がそれですね。

霧雨はねえよ・・・とか思いましたね、自分で

氷雨ちゃんはきつともうすぐ出るはず。

フルネームは・・・氷雨ひさめ 花月かつぎ

こんなネタをやりたい

花月「わがまま言わないで。あなた一人に何ができるといふの?」

雷花「ドミノ倒しとか」

花月「よせ。悲しくなる」

パクリと言われても構わない（構えよ・・・）

他にはモブキャラになってたりする

董さんなんかも

名字と兄弟がいたりするんですね。

新キャラなんか増やしてたまるか。

筆者の記憶力はものすごく低いから新キャラが出るとモブ率が無駄に高くなります。

ヒロイン名（仮）

ボツだったものを・・・（作ってもらっておいて何言ってるんだか・・・）

ひょうりんももか  
氷凜桃花

きげいひなづか  
如月氷華

ふじわらひょうか  
藤原氷華

川井沙希  
かわいさき

ですね。

後はモブがいっぱい。

真崎雅浩  
よめない  
まざき

華島雅人  
かしまさと  
は

四季咲樹  
しきひな  
は

八雲蘭丸  
やくもらんまる  
は

李六夜 蘭丸  
いざよいらんまる  
り

西條真実  
さいじょうまみ  
は

秋羽枯葉  
あきはかれは  
は

栗松団栗  
くりまつどんぐり  
は

水仙証幸  
すいせんまさゆき  
は

椿楸  
つばきひつぎ  
は

柊榎  
ひいらぎのき  
は

→の季節を表現したかったんだね。

柊実 ひいらぎみこと

草ノ芽乖離 くさのめかいり

柊躑躅 ひいらぎつつじ

落葉楓 おちはかえで

早乙芽樹 さおとめいつき

早乙芽董 さおとめすみれ

→モブキャラゾーンにいたし

桜田樹理 さくらたじゆり

森木樹理 もりきじゆり

木根真樹 きねまき

主人公の名前色々

藤原零花 ふじわられいか

← 藤原麗華 ふじわられいか

← 藤原雷華 ふじわられいか

← 藤原雷花 ふじわられいか

になりました。

最初モブだったんだね雷花。

ぐーやは色々あつて名前出てきた。

実際無なしで行くと思ってました。

きつと次回は筆者の都合でドラゴンが出てくるはず。

筆者はドラゴンをロマンだと思ってる。

番外編「筆者が凍雷をかくまで。」（後書き）

はい、どうも筆者です。

暇で暇で忙しかったので

昨日の夜も眠らずに昼寝しながら小説のネタを考えました。

頭の中で完成してないので時間延ばしのために過去ログあさったり  
しました。

きつついぜ！

龍（りゅう）と雷花（アイツ）とかわいげのない花梨（ワタシ）（前書き）

見たことある人は知ってそうな名前ですね。  
パメラってなんぞ・・・

龍（りゅう）と雷花（アイツ）とかわいげのない花梨（ワタシ）

Side・花梨

ただいま。

現在赤い穴落ちてるところなう

今回は筆者が筆を折ろうと思ってるらしいです。

なんでも学校が始まったとやらで毎日連載してる暇ないとのこと。

だったらなんで今書いてるんでしょうかね？

ある意味謎です。

今回は筆者がロマンだと思っているドラゴンだ、そうです。

キヤー！ドラゴンだって！

さて、一通りぼけ倒したところで。

赤い穴終了。

「おお、召喚できたぞ。」

「本当に言い伝え通りになるとは・・・」

「藁にすぎる気持ちで挑戦してよかったですね。」

なんだかわかんないけど・・・

「あんたら何よ？」

「!？」

あれ？変なこと言った？

「なぜ・・・私たちの言葉を・・・」

あ、そっちな

なんでもこの3人のおじさんたちは私を使って村に襲いに来るモンスターを討伐したいだそうだ。

自分でやろうよ・・・

「で、私一人で倒せるとでも？」

（筆者はソロでアマツマガツチ倒すのに50分近くかかりました。）

「いや、さすがに無理なのはわかってますし、この召喚魔法は力の強いものと呼ぶものではありませんから。」

「こちらです。」

なんだか臭い部屋に連れてこられた

「これをご覧ください。」

・・・え？

そこには飛竜フイバーンが寝ていた。

「・・・これはドラゴン？」

「はい、その通りです、この通り今は寝ていますが炎を噴きますし人を乗せて飛びことも多分可能です。」

「多分って？」

多分って何よ、多分って

「それは乗りこなすには竜との信頼関係だけでなく必要不可欠なものがありますし。」

あれか、ドラゴンライダーの証的なものか。

「竜と心を交わすことができる瞳をもたない物は竜と会話することさえままなりません。」

ああ、そういうことか

「それがこの右眼なわけね？」

つまり私のこの右眼は竜と心を交わせるものだ・・・

「で、この竜と心を交わすだけじゃダメなんですよ？」

そりゃあいきなり竜に乗ってうまく操れるなんて思わないよ。

「・・・察しがいいですね。」

さとりって言われちゃったしね・・・雷花に

「いえいえ、それほどではないですよ。」

別に割とテンプレ見なくなってるしね。

「じゃあ、竜と話をさせてもらいましょうか？」

「今ではなく竜が起きてからでいいですか？」

まあ、別に私はこの世界でやることはないから後でもいいけれど・・・

「あれ？そういえば何で言葉通じてるんだろうね？」

言葉って簡単に通じるものなのかな？

「あ、それは竜の鱗を素材に作った魔法ですから翻訳機能くらい追加効果であつたんでしょう。」

便利だね、竜。

見た目かっこいいし、強いし、飛べるし、早いし、かっこいいし、便利だし、万能だし、かっこいいし

「グルル・・・」

「あ、起きましたね。」

おおう、立ちあがると割とでかいな・・・

グルグル言いながら喉鳴らしてるよ、なんかかわいい。

「で？どうやって会話するの？私知らないんだけど」

「近いづいてもらえます？」

え、あれに近寄るの？怖くないかね？

にしても真っ赤だな・・・

「あ、爪と牙には毒があるので気をつけてください。」

え、先に言っただけだったよ。

「む？」

「え？今なんか言っただけ？」

「いえ、何も言っただけですよ。」

じゃあ・・・こいつ？

「なんぞ？」

いや、いきなりなんだよ・・・

ていうか、竜「インツ」か・・・

「いや、いきなり連れてこられたんだけどね？私。」

「ふむ、そうか、で、何用だ？」

あゝ・・・話続かねえ・・・

「契約？みたいなをしたいな・・・と」

「おｋ、把握」

・・・この竜何者よ。

「竜です、異世界在住の。」

異世界って言っちゃうのか！

「お主からしたらこちらは異世界であろう？」

何であんたが知ってんだよ・・・

「ふむ、で契約か・・・」

所であんたの声は周りに聞こえてるのかな？

「あ、心に思うだけで会話はできるんで、」

なんだ、心を本当に読めるだけなんだね。

「便利だろう?」

あんたは何でしゃべってるの?

「おれの考えてることはそっちに聞こえないから」

こっちから一方通行で筒抜けなんだ・・・

龍（りゅう）と雷花（アイツ）とかわいげのない花梨（ワタシ）（後書き）

花梨はドラゴンにであつた！

願わくば花のもとにて春死なんその如月の望月のころ（前書き）

筆者は知り合いに小説書いてるのがばれました。

めっちゃ恥ずかしいぜ

これはもう・・・

願わくば花のもとにて春死なんその如月の望月のころ

竜との理不尽な会話について理解した私は・・・

なぜか竜と戦闘することになりました。

どうやら乗るんだからそれなりに戦えないとすぐに死ぬ、だそうです。

で、闘いになったと・・・

武器はなしだそうです。

これって竜相手に素手ってことだね？

えゝ、勝てる気がしないよ・・・

「別に勝たなくてもいいんだけどさ？」

まあ、落ちないかどうか確かめるためみたいだし。

本気で行くか、死にたくはないな。

「さあ、こい！」

某金属の歯車の歩く平和みたいなセリフ言いながらこっち来たよ。

・・・遅っせ

とりあえず顔面に蹴り。

吹っ飛んだ。

「「「「・・・何？」「」「」

え、皆さん揃って？

久しぶりに来たね全身ローブの人たち

「王種であるこの俺に蹴りを入れてだけでなく吹っ飛ばしただと・・・？」

王種ってなんぞ？古龍みたいな？

「あの一撃眼で追えなかったぞ・・・」

雷花なら余裕でよけられたと思うよ

「ライカ？」

何よその発音

「そのライカが何者かは分からないがすごいことだけはわかった。」

雷花は自称王種の竜に認められた！

S i d e ・ 竜

さて？

だるいんですが、ちょっと本気出そうか？

ジョギング感覚で走る、人間相手にはこれでも早いらしい。

花梨が飽きれてこっちを見ている。

どうだ、眼で追えないだろう？

なんて思ったら体が宙に浮いた。

え？何が起きた？

花梨に蹴りをいれられてました……

かなり痛いです。

花梨は涼しい顔してるし……

手抜きだったそうです。

やだ何この子瞬間移動とか人間の枠飛び越えてる……

どうやらライカっていう人はあのくらいなら余裕で躲わせるそうです。

あんたらどうという身体能力してんだ。

そんなことがあって今。

花梨にまたがられています。

花梨エ・・・

めちゃくちゃテンション高いし。

S i d e ・花梨

何これ楽しい。

空を飛んでもらってるけど飛んでくる怪物を全部竜が撃墜してくれてる。

戦った感じ弱そうだけど割と強いよね。

火球噴いたり火炎放射したり使い分けられるみたいです。

爪に毒あったり赤かったり火球吹いたりしてるから火竜の雄みたいだと思っちゃったよ。

正直竜一匹でどうにかなるんじゃないの？

この怪物が魔物らしいし。

「花梨、俺一人じゃ周りの人間程度じゃ止めらんないから、言葉わかんないし。」

言葉わかんなかったんだ・・・

「だから異世界在住だと・・・」

あれ？出身この世界じゃないの？

「召喚されました。」

おまえもか・・・

「召喚されるなり落とし穴にはまりフルボッコされて、気づいたら下りの中にいました；；；」

リアルモンスターハンター・・・

数の暴力には勝てないわけか

「YES！MyMaster！」

なんで英語なの・・・

Side・まもの脇役

1・テリトリ空を飛んでる赤いのがいたから追い払おうとしたらいきなり火を吹かれました；；

2・仲間がやられたので助けに行ったら撃墜されました><

3・みてるだけで撃ち落とされました。

4・15・火炎放射で燃やされました。

16・話し合いをしようとしたら食べられました。

神無月・魔物たち大変ですね。

脇役一同・それほどでもない

神無月・謙虚だなあ・・・所で謙虚なみなさんの思ってることは？

脇役一同・とても痛いです……

願わくば花のもとにて春死なんその如月の望月のころ（後書き）

魔物かわいそうですね。

神無月よ・・・

知り合いにばれたのになぜそうも書き綴る・・・

魔法の概念って何？（前書き）

神「眠いです。」

雷「その神って表現ナルシストっぽいよね」

神「俺も思った。」

雷「で、何で眠いの？」

神「モンハンで新しいオトモ雇ったからレベル上げてた。」

雷「名前を聞こうか。」

神「雷花と花梨です。」

雷「解ってたよ、うん。」

魔法の概念って何？

S i d e . 雷花

魔法って何だろう。

ふとそう思ったわけだ。

ぐーや（名前めんどい）が言うには自分にとって一番身近なものだ  
そうで。

電気ねえ・・・P C ? ゲーム？

だとしたらこの世界には電気少ないのもうなずけるけど・・・

水とか風とか土が多いらしい和の国。

名前はポツカワらしい。

なんかかわいいな。

ぐーやが時属性なのは長生きだからだろう。

レウ・・・なんだっけ？フルネーム

「ぐーや固定でいいか。」

「考え事してると思ったたらいきなりそれですか・・・」

ッ！

ぐーやに背後をとられた！

「なかなかできるな・・・」

時属性の魔法つて時止められるのかね？

もしも止められたらその間にフルボッコできるはず。

「ぐーや」

「いきなり何？」

「ぐーや」

「だから何？」

「ぐーやって把握してるわけか。」

「謀ったな！」

・・・こんなキャラだっけ？

「お前偽物だろ！」

「なぜわかった！」

「えっ」

「えっ？」

・・・偽物・・・だと

よし。

「このおれをだませると思ったのか！」

「思ってたさ！」

「で、あんただれよ。」

「神無月さ！」

「帰れ。」

「（´・ω・｀）」

「顔文字つざいです。」

「（´・ω・｀）ノシ」

「え、顔文字で表現。」

かなづきはきえていった！↑某竜クエスト風

「雷花・・・なにしてるの？」

「お前は本物？」

「どっぴろっぴ。」

ジーン

「（汗）」

ジーン

「（汗）」

ジーン

「私の魔法じゃ攻撃できないんですよ・・・。」

「ではぐーやの特徴をあげなさい。」

「ぐーや？」

本物？偽物？

「本物です！」

「心を読んだ・・・だと？」

S i d e ・花梨

私の出番が多いのは雷花を動かすににくいからなんだね！

はい、花梨です。

竜の名前を決めようってことになりました。

リオレウス・・・はアウトだね。

！

ザクロ・・・なんてどうかな？

「由来を聞こう」

赤いから？

「・・・理由は不服だがその名前は気に入った。」

ザクロって人肉の味がするみたいなんだね、怖いね〜

「食べるなよ？絶対に食べるなよ？」

竜なんて食えんで、あんた毒あるし。

「人肉っておいしいのかな？」

そんなこと言いながらこっちみんなおいしくないよ。

「ふむ、女の肉は柔らかくてうまいと昔誰かが言ってたことがあるな。」

いや、食つなよ？そもそも男と食べ比べしたことあんなのかそいつ。

「自分を殺しに来た人間を殺して食べたところで何の問題もあるま

い。」

竜は危険だしね・・・

「自分から剣を置けば助けてやらんこともないとも言っていた。」

まあ、素手の相手を襲うとか・・・

「機嫌悪い時は王とに襲来して壊滅させたらしいが。」

自称王種のあんたはすごいの？

「王種とはその種族での起源であるから上の存在などたくさんいるだろう。同種レッドドラゴンなら余裕で倒せるが。」

そーなのかー

「竜人なんかもいるぞ？」

なにその竜に変身できそうな種族

「変身はできないな、簡単な会話ならできるが。」

ふーん、大変なんだね。

「戦いマダー？」

カリスマ（偽）はここまでだったか・・・

「めんどくさいです。」

王種エ・・・

「カリスマは投げ捨てるもの！」

ジョインジョイントキィ・・・

「花梨殿。」

あ、ローブA久しぶり

「何？」

「あまり竜を外に出さないでもらいたい、食べられそうだから・・・」

「人なんか食べてもおいしくないさね。」

王種なんだからもう少しっこいいしゃべり方を・・・

「こっちが素だしね。」

「そういえば・・・この世界の魔法ってどんなの？使ってみたいんだけど。」

「花梨殿なら魔法を使わずとも簡単に戦えそうですが？」

「竜に乗ったままどうやって戦えと・・・」

「そこまでは考えてなかったね。」

おい、ローブ

「魔法教えて。」

「竜に聞いてください、魔法とはもともと竜が使ったためにあるものですから。」

そうだったの？

「もつと言えば祖龍が作ったものだな。」

真っ白い雷落とす龍かな？

「なぜわかったし。」

いや、祖龍って言うത്私の中だとそうなんだよ。

「お前が時々わからなくなるさね」

その『さね』ってなんなの？うざいんだけど

「ワカンネ」

「花梨殿・・・」

「何？」

「竜が怖いのでどっか行きますね？」

ヘタレ・・・

「我もそう思う。」

自称称固定しよ？

「僕は古来よりこの世の行く末を見守ってきたのじゃ・・・」

召喚されたんじゃないかったっけ？

「そうだね。」

魔法教えて。

「俺起源であるからこそ炎しか使えないんだ。」

「炎？」

「炎だと！？」

おいローブ逃げたんじゃないかったのか？

「花梨殿、炎と言いましたかな？」

「言ったね。」

「この世界には木・火・土・金・水・時・空の7つの属性があるのです。」

ふーん

「炎は火の上位であり一握りの魔法使いしか使えないのです。」

ザクロってそんなにすごかったんだね。

「そもそも人じゃないしな。」

まあ、そうだけど。

「だから何さ？」

「炎属性の魔法は使えるようになるまで相当の努力が必要なので一朝一夕では使えません。」

そなの？

「俺って王種だから他のレッドドラゴンはいざ知らず最初から炎だけでした。」

火属性のレッドドラゴンもいるの？

「俺の亜種の亜種で正確にはレッドドラゴンじゃないやつならいるな、いろんな属性を扱えるんだろつが。」

いろんな王種が混ざることによって多属性を使えるけどその分威力は落ちるみたいな？

「そんな感じだな。」

「で、ローブの人。」

「なんでしょうか？」

「炎を使えるような条件は？」

「修練と運と起源と得意属性ですね。」

「貴方は？」

「貴方を召喚したことからお分かりでしょうが空間です。」

「へえ……」

ねえ、ザクロ？

「何だ？」

時間と空間の二種はレア？

「まあ、基本的には珍しいな。」

「ローブの人。」

「はい」

「貴方はどれを組み合わせたの？」

「組み合わせとは？」

「運だけでも魔法は使えるでしょ？」

「まあ、精度は低くなりますが。」

「貴方は？」

「修練です。」

「頑張ったんだね・・・」

「・・・はい。」

「得意属性は？」

「土です。」

「本当に頑張ったんだね。」

遠い目し始めたよローブの人。

ザクロ。

「何かな？」

山奥行こう。

「何でだ？」

炎魔法使う。

「お前の得意魔法は？」

わかんない。

「じゃあ・・・イメージしてみる」

何を？

「火を。」

何で火？

「俺が受け止めて得意魔法かどうか確かめる。」

・・・火が苦手なら？

「あきらめろ、使えない。」

仲間を呼ぶのは？

「俺召喚されてるんだ。」

わかった。

火をイメージしてみる。

燃え盛る・・・燭台にある蝋燭の火・・・

「イメージしている炎が弱いな」

イメージの関連性を聞かせてもらおうか。

「魔法を使うにはイメージが必要だ。」

どんなイメージがいいかな？

「お前の闘いにどう組み込ませるんだ？」

拳とか脚に炎を纏わせて肉弾戦だね

「蹴りで俺を吹っ飛ばしておいてさらに属性付与か。」

一撃で斃す！

「わかった、じゃあ拳に炎を纏わせるイメージを。」

CODE：BREAKER初期の大神でいいかな

「繊細にイメージしたな。」

そりゃあ・・・筆者は全巻持つてるし

「そのまま魔力を込めるイメージで。」

その魔力を込めるイメージを正確に教えてください。

「そうだな・・・こう身体の中から力を集めるイメージで。」

とりあえずその前に山奥行こう。

「了解した。」

乗りながらイメージするから。

「乗れ。」

はいはい・・・

おお、速い速い！

また怪生物だよ・・・

「殺るか？」

うん、どうせ後で戦うことになるんだし。

「容赦ないな。」

私は敵に優しくできるほど器用な強さを持ってないんだよ。

「かつこいいこと言っても無駄だ。」

むっ・・・

「着いたぞ。」

速いね。

「もともとあそこは山の中腹あたりだったしな」

なんであんなところにいたの？しかもいっぱい。

「知らんよ、言葉知らんし。」

そうだったね。

「じゃあやってみろ。」

こうかな？

「魔力が集まってるのは感じられるな」

S i d e ・ ザ ク ロ

確かに魔力は集まってるがとてつもなく容量が少ないな・・・

確かにイメージはいいが・・・

本来魔法とはイメージにも需要はあるが魔力量が一番影響する・・・

イメージ2：魔力量8くらいか？

どれほどイメージが繊細でも魔力量が少なければ威力は低い、逆に量さえ多ければイメージが悪くとも威力は高くなる・・・

打ち出すことはないから少なくとも戦えるが長期戦には向かないな・・・

S i d e ・ 花 梨

力を感じるけど全然集まってる感じがしないなあ・・・

ねえ、ザクロ。

「なんぞ？」

私の魔力って多いの？

「はつきり言って少ない。」

やっぱり？

「うむ」

戦いに支障は？

「一応戦えるが長期戦には不利だ。」

魔力ってどうしたら増える？

「修行でも増えるが才能によるものが多いな」

私は魔法に向いてないんだね？

「あることにはあるが大変だぞ？」

それを聞かせてもらおうかな・・・

「素手で魔物を倒してその肉を食らうことだな。」

魔物自体は弱いよね？

「ふつうは強いはずだがお前からしたら弱い部類に入るだろうな。」

肉っておいしいの？

「魔物の種類によるな。」

わかった、そこにいるのは？

「焼けばうまい。」

見た目豚からかな・・・普通においしい見たい。

じゃあ行ってくるね

「どついう意味だ？」

そこにいるの全部倒す。

「食べきれるのか？」

あ、

「食べきれないなら斃すな。」

1匹ならいけるね。

「わかった。」

~~~~3分後~~~~

思ったより堅くててこづっちゃったよ。

「魔物を素手で斃すだけで十分異常だぞ？」

焼いて。

「いいぞ。」

所で魔力量こいつどのぐらいなの？

「お前より多いな、そもそも魔物自体が魔力の塊だ。」
なら損ではないわけだ。

「俺も食べていいか？腹減った。」

あんた食べても私の魔力量の増加量変わらない？

「ああ、」

ちよつとそこにいる豚全部倒してくる。

「やめろ、生態系崩れる。」

この程度で崩れるの？

「崩れないんじゃない？」

よし狩る

「だからやめろ」

なんで？

「1匹で十分だ。」

じゃあ・・・

豚普通においしかったです。

魔力に関してはよくわかんない。

「それでも最初よりは多くなってるぞ2倍くらいに・・・」

元が低かったんだからね・・・

「ああ、俺が100ならお前は1にも満たないな。」

そんなに低いのか。

「人はそもそも俺から見て20程度だ。」

王種だから多いの？

「レッドドラゴンは魔力量は総じて少ないぞ、下手したらただの魔物にも劣るかもしれん。」

人間が少ないのね。

「その通りだな」

魔法の概念って何？（後書き）

神無月です。

また魔物に犠牲者が・・・

魔物と神無月は友達！

魔王ポジションにはつかないよ？

唯在るだけで害為す物（前書き）

神「藤の花って綺麗だよね。」

花「雷花のこと？」

神「いや、素で。」

唯在るだけで害為す物

Side・花梨

魔力が上がった実感わかないや。

そっくりそのまま自分に来るわけじゃないみたい。

とりあえずザクロと一緒にそれなりに美味しい魔物を倒してるところ。

がんばれば大型を相手にすることもできるだろうってザクロは言うけど・・・

大型は総じて堅いしおいしくなかったり毒とかあるらしい

弱い方にも身を守る毒があるから豚くらいしかまともに相手にできない（おいしくないし）

「花梨がとる戦い方なら三日三晩炎を出しっぱなしでもたたかると思うぞ。」

んじゃ、イメージからの・・・魔力って効率いい集め方ないの？

「こう・・・全身から拳に力を集めるゝみたいな感じでいいんじゃないかな？」

前回とあんまり変わらないコメントありがとう

「構わん」

皮肉ったんだけどなあ・・・

よし、行くか。

燃えろ！

シュボツ！

おお、ついた。

「両手両足に着けるときは服につかないように気をつけるよ？」

でも、これはザクロが教えてくれたわけじゃないよね。

「そりやお前の得意魔法を確かめるためと言ったんだ、その程度なわけない。」

不死鳥とかいいよね。

「出来なくはないが・・・今のお前じゃ無理だぞ。」

貴方はできるの？

「一応できるが王種だからこそ余計に特徴が浮き彫りになってるんだ、魔力量のせいで1発程度しか打てない。」

じゃあ私じゃ無理だね。

「無理さね。」

で、魔法何か教えて。

「火の雨を降らせる・・・みたいなものでいいか？」

十分強いんじゃないかな？

「お前の魔力量なら5発撃って魔力切れを起こすが。」

火の雨の範囲と威力によるね。

「範囲は自分の視界全体で威力は純粹に炎としてのものだけだな。」

視界全体ってことは後ろには無しと・・・

「そうだね。」

えっ・・・

とりあえず教えて。

「いいが・・・」

実演してくれました。

口から吐く炎の方が強いねこれ。

「まあ、俺の場合は起源としての力だしな。」

私の魔力量も威力に左右されるんだよね？

「そうなるな」

実際あまり実用できるものじゃないかな・・・

「そもそもこれは牽制ようだしな。」

確かに火の道を歩きたくはないね。

「だろう？」

まあ、無駄な戦いは避けたいからこれはこれで習得しておきたいけど。

「そうだな・・・目の前が真っ赤に燃えるイメージならどうだ？」

技名とかってないの？

「筆者に名前をつけろという方が酷だ。」

（厨二度が高くなります。）

そうだね、じゃあやってみるよ。

「お前はイメージだけは無駄にいいからな。」

だから威力はそれなりなんだよ。

「低いよりはいいがな。」

威力は上がって悪いことはないでしょ？

「悪い点もあるぞ？」

え、説明求む。

「魔法を受けるダメージはイメージに左右されるぞ。」

たとえば火の魔法っぽい幻術食らって火傷したと思ったりかな？

「幻術？空間魔法のことか？」

あゝ・・・空間魔法にそこにあるものがあるように見せる魔法と
かあるの？

「あることはあるが人間に使えるような代物ではないな。」

え、そんなに強くなさそうだよ。

「人間は魔力だけ高くてもいいわけではない、イメージも必要だからな。」

つまり・・・完全なイメージができないから中途半端なものができるってこと？

「お前のイメージは繊細だが普通の人間はただ火としかイメージしていない。」

その分魔法耐性があるんでしょ？

「まあ、そうなるな、だからお前は魔法を使えないのに魔法のダメージが多いことになる。」

うわゝ・・・意味のないことしちやってるのかな・・・

「じつは魔力を渡すことができるんだが。。。」

ザクロ！

「やらんぞ？」

なんでさ？

「魔力使って飛んでるからさ。」

その羽は何の意味にあるよ。

「羽を動かして身体を宙に浮かせることだけはしてるさね」

浮力を得てるみたいな感じかね？

「俺もわからん。」

呼吸の仕方を意識するとどうだかわかんなくなっちゃうみたいな？

「そんな感じさね」

で、頂戴。

「今の話聞いてたのか？」

だってあんたが走るより私の走る方が早いもん。

「飛ぶのは？」

・・・負けるね。

「魔力は俺低いんだよ。」

魔力を上げるためなら人殺しもいとわないよ！

「それはやめろ」

本当にやるよ？

「殺して魔力を奪うわけじゃないさね」

じゃあどうするよ？

「相手が魔力を送ることを認めることだな。」

酔った勢いで送っちゃったり？

「呪文詠唱が必要だ。」

酔った勢いじゃ言えないね。

「あと普通の人間じゃ使えないだろう」

人間を殺して食べるのは？

「もらえるかも知れんが・・・」

ロープの人食べられるの怖がつてたのはそれかね？

「それは違うだろう・・・」

死にたくないだけだね。

「一般的常識で考えればそれが普通だ。」

結局竜って何なの？

「自然、妖精とは違うクラスの。」

レベルが？

「それだけじゃないけどそんな感じだな」

へえ・・・

S i d e ・ ロープ

気が付いたら花梨さんがどっかに言ってました。

竜と一緒に。

まだ一枚残ってるけど召喚成功するかどうか・・・

召喚^よんでみるか・
・
・

唯在るだけで害為す物（後書き）

筆者は感想をもらつとテンションが上がります。

人であることをやめた花梨に弱点はない。（前書き）

花梨は別に人をやめませんよ？
なんとなくノリです。

花「筆者は私を書いてくれって知り合いに言いまわったそうです。」

神「ふっきれたんだよ！」

花「書いてもらえたじゃん。」

神「すごく上手くて嬉しくなった」

花＆神「本文でどうぞ」

人であることをやめた花梨に弱点はない。

青森の純子さん作

> i 3 0 4 3 7 — 3 9 0 8 <

花梨です、色つきです。

青森の純子さん作

> i 3 0 4 3 6 — 3 9 0 8 <

なんでこんなに上手いのになにボツって書いてあるんだろう・・・両方
没って・・・

S i d e ・ 花梨

筆者はまたフラグを放置したようです。

「何の話だ？」

いや、関係ないね。

「さて、魔法を伝授したいのだが？」

よし、不死鳥を教えろ。

「その前に契約をしないか？」

ああ、結局放置されてたあれか。

「俺がしゃべらないでも済むようになるし。」

一方通行じゃなくなっただけか。

「正直思ったこと全部筒抜けにしない方法はあったんだがな・・・」

教えてくれたっていいじゃないか！

「ローブの人に会いに行くぞ。」

契約ってあそこじゃないとできないの？

「あいつじゃないとできない。」

空間のくせに・・・

「土と空間は相性がいいんじゃないか？」

まあ、自分のいる座標に指定できるしね・・・

「さて、行こうか。」

速すぎると気持ち悪くなる・・・

「俺より速く走れるくせに何を言うか。」

本気出したら飛んでるあんたより早いよ。

「俺の必要性を否定された気になるからやめてくれないか？」

情報源は必要だから。

く5分くらい。く

「花梨殿帰ってきたのですか。」

「ごめん、割と長引いた。」

「契約はしましたか？」

「ここじゃないとできなかったんじゃないの？」

「俺が嫌だっただけです、はい」

あんた後で覚悟しておけ。

「ごめんなさい……」

「契約しようか……」

あ、始めるみたい。

「いつでもおkだよ。」

「では……汝花梨は紅き竜と契約を交わし共に闘うことを誓いますか？」

なんか結婚式見たい。

「「誓います。」」

あんたも言うのかザクロ

「では……神魔の理においてここに契約をする。」

おお！身体が光り輝・・・くこともなく

「終わり？」

「はい、そうですが？」

「特に変わらないんだけど。」

「口約束みたいなものですから。形式だけですよ。」

ザクロが山奥はいやだっていった理由は何よ？

「少し、待て」

ん？どうしたのかな？

「よし、いいぞ」

何があつたの？

「お前に魔力を与えた。」

え、だめなんじゃなかったっけ？

「1割にも満たない魔力だけどな、炎系統にしか影響されないし。」

微妙だね。

「不死鳥なら打てるぞ。」

火の雨を完全習得してからでいいです。

「花梨殿、これを・・・」

なんか服もらったよ。

「これなんか意味のある服？」

「一応風魔法を編みこんであります。」

この人風魔法なんて使えたっけ？

「3人いたから誰かが使えたんだろ。」

あ、そうか

「効果は？」

「体が軽く感じる程度でしょうか？」

便利だねー

「お前はもともと軽いだろ、胸ないし。」

お仕置きね。

「ごめんなしあ・・・」

許さないよ。

「今のうちに逃げておきますね。」

「花梨殿。」

またか・・・

「魔物の退治忘れないで下さいよ?」

忘れてたけど食べたりしてるから大丈夫だよな?

「うむ、平気だ。」

いつの間に帰ってきたよ。

「眠いです。」

はいはい・・・

「この服は情報隠蔽の効果もありますので・・・」

「隠す必要なんてあるの?」

「勇者なんてものは大々的ですが竜は不吉の証としても取られますからね・・・」

あんた・・・大丈夫なの?

「じつは俺・・・人に変身できるんだ。」

先に言え。

「速く両手に炎を纏えるといいね。」

うん、がんばるよ。

「あと花梨はもう人間じゃないから。」

え？

「魔力的にはもう魔族扱いです。」

魔族と人間の差を。

「単純に魔力量。」

それだけ？

「後は特にないね。魔力が一定量を超えると眼の色が変わるとかな。」

私は？

「今の所変わってないよ。」

見た目変わってほしくないなあ・・・

「花梨なら変わらないでしょ。」

なんかcharismaどこ行つたの？

口動かすのたるいんでもう念話で行きます。

お前・・・

さて、魔法をば

拳に炎なら頑張ろうと思う。

我が魔法を扱うと森が大変なことになるので使いません。

割と火吹いたりしてたよね。

気にしてはいけないのです。

「では私はこれで。」

あ、どっか行った。

そのようだな。

私着替えるね、この服着てみたいし。

俺は外に行きますね。

なんで敬語よ・・・

おお、本当に軽いよ、逆に裸なんじゃないかって違和感感じるくらい。

なんかエロいな。

うるさい。

ごめんなさい

よろしい。

よろしいって言うてる割にはうまく拳に炎を纏わせてるし目が笑ってないよね。

天誅だーっ！

え、ちょ

ザクロは犠牲になったのだ・・・私の炎にな。

みた感じ1回殴られる感じしたけどダメージ100回超えてたぞ・・・

108できつちり止めたよ。

お前本当に炎いらないだろ。

打撃効果ないやつにも有効でしょ？

そつだが・・・剣は使わないのか？

剣に炎を纏わせて切るって？

「そんなことできるやつがいたな・・・」

ダブリはよくないよ。

さて、出発しようか。

S i d e ・ 雷花

筆者はあとで雷で感電ルートだな。

神（やめてほしいかな。）

人であることをやめた花梨に弱点はない。（後書き）

雷花の出番なんてなかった。

主人公より脇役の活躍する小説タグはもらった！

花梨はヒロインですらありません。

花梨！好きだ！結婚してくれ！（前書き）

花「いやだ。」

神「ひどっ！」

雷「ヒロインと出番ください……！」

神「別にいいけど……ヒロインはまだね、性格思いつかない。」

雷「ツンデレでいいじゃん。」

神「前回のイラストで花梨がツンデレみたいになったんだもん。」

雷「あれはかわいかったな。」

花「ほめてくれてありがとうね。」

神「結婚してください」

そして∞ループ……

花梨！好きだ！結婚してくれ！

Side・雷花

久しぶりの出番だ！

「すいませんが3日間も書物庫に引きこもらないでください・・・」

筆者は花梨の時系列メインだから雷花も最後の場所でそのままワープだね。

後話続かない。

「泣いてもいい？」

「戦争に出てくださいよ・・・」

「いいよ・・・」

↓場所移り戦場↓

「そうだ、ぐーや」

「なんでしょうか？」

「時間を飛ばして敵を腐らせればいいんじゃない？」

「あー！」

５分後

敵国の城にて

「参りました。」

・・・弱ッ！

何なんだこいつら・・・

「いえいえ、次やったらもう一回潰す。」

ぐーやキャラ変わってるし・・・

「やめてください・・・」

１０分後・書物庫

「そついえばぐーや？」

「はい、何でしょうか？」

「なんでそんなに偉くないはずのぐーやが敵国に行ってたの？」

「お父様が一番強いんだから向こうでも殺されないだろうと・・・」

お父様って王さまだよな？・・・弱くないか・・・

「なんであんたら今まで気づかなかったの？」

「魔法はイメージで使えますからそもそも誰も考えなかったのですよ。」

いや、一人ぐらいいるだろうに・・・

「後あの範囲だと魔力も必要ですし」

竜人族は魔力が多いって聞いたことがあるな。

S i d e ・花梨

雷花出番無いのは固定になったんだね・・・

私はイラストをもらったり絶好調だよ！

> i 3 0 4 3 7 — 3 9 0 8 <

筆者のお気に入り。

「我はまだ見てなかったけど今と服装は違うんだな。」

そりゃあ・・・頼んだの緑服出る前だし。

「感覚がエロいやつか」

しつこいよ？

「うめんなさい」

筆者の都合で緑色になったんだよね。

「どんな都合よ？」

筆者がデジタルで画像書いてたら服緑っていうか迷彩になった。

「それはまあ・・・」

それと魔法の杖を持つかもしれないって。

「お前今までの行動からして格闘系だろ」

色なしの方での杖みたでしょ？

「残念！俺は見えていなかった。」

きつと後々出るのよ。

「そうなのか」

そういえば筆者は私の人形を作ろうとしてるみたいよ。

「どんだけ好きなんだか・・・」

フェルト買いに行ってるのを見たって言う人がいたの。

（でも綿が売ってませんでした；；）

「それは大変だね。」

（うん。）

本当に作るつもりなんだ・・・

花梨！好きだ！結婚してくれ！（後書き）

はい、神無月です。

貧乳は正義。

きつと私の中でヒロインは花梨なのでしょう。

物語のヒロインは氷雨だけだね。

氷「私下の名前だと花梨とかぶるんだけど。」

神「龍堂花梨って名前じつは龍堂火燐でもいいかなって思ってきた。

」

火「つまりこうね。」

氷「やめてよ、神と氷と火と雷ってまるっきり属性じゃない。」

神「神属性ってなんか強そう。」

花「同感」

神「氷雨はクーデレでいいかな。」

氷「デレはいらないよ・・・」

花「クールだけってキャラ薄くなるよね。」

神「雷花と絡ませるんだからキャラ濃くしないと。」

レ「私の出番は・・・」

火＆氷「え？誰？」

ぐ「ひどい・・・」

雷「レかぐか白黒はつきりつけろよ。」

神「お前は幼女の裁判官か」

そろそろ1章終わりにしようぜ！（前書き）

花「そもそも一章なんてついてたっけ？」

神「これが投稿されるであろう木曜日に作る。」

雷「日曜日に木曜日用の作ってんじゃねえよ。」

神「じゃあ雷花の出番は8000文字くらいあってそのうち500文字しかないけどいいと。」

雷「やめろ、悲しくなる。」

花「私の出番多いんだろうね。」

神「イラスト描いてもらってるしね。」

雷「俺は？」

神「設定が少なすぎる、黒髪黒眼の170cmって・・・」

花「名前とか関係ないもんね、女みたいって。」

氷「いつになったら出番来るの？」

神「2章はついに旅立つんだよきつと」

そろそろ1章終わりにしようぜ！

Side・雷花

「あのさあ、俺思っんだ。」

「なんでしようか？」

「俺の出番少なくてっつて」

「・・・そうですね。」

「俺の仕事って何だっけ？」

「魔王倒してこい。」

「そっいえばさ。」

「何でしょうか？」

「言葉って教えてもらってないよね・・・」

「あ。」

のののの

ののの

ののの

のの

の

筆者またこれか、好きだな。

(花梨の時はめったに出てこないよ。)

「言葉はわかったから。」

「1週間ですか。」

うん・・・筆者の都合で。

「Ich packe leichtes Gebet in dieses Himmels ein, und das Zogern schlägt es in einem Tropfen vor und entwerst es, und bezaubern wir Sie?」

「Ich halte Selbstsuchtigkeit, die ich bete, und einen Stern daran zu binden, lehnt ab, flutet eringly in diese Brust zu helfen, und der Himmel des blauen Himmels fordert abgelegene Hoffnungen, morgen Wind und Ziele dabei zu wissen」.

(何語だか忘れたけど翻訳機使用。)

(まったく会話は成立していませんのであしからず。)

「いいんじゃないですか？」

「やっぱり使いにくいわ・・・」

ポフツカワ・・・相変わらず名前かわいいな。

筆者は1章完結させたら地名とかいろいろ紹介するらしい。

花梨はマンネリ化したイラストがつくらしいよ！

Side・花梨

「筆者も飽きないなあ・・・」

SideEnd・

「ところでレウコスペルムム・コルディフォーリウムさんはさ。」

「久しぶりにフルネームで呼ばれましたね。」

「レウスでいいかね？」

「スペルにしてください。」

「なんでさ」

「なんかレウスはいけないうて気が・・・」

「スペルね・・・ぐーやでいいんじゃないね？」

「貴方に教えてもらった魔法を打つしかない・・・」

「やめてください、ごめんなさい。」

「解ればいいんですよ。」

なんかだんだんキャラ変わってきたよね。

「お父様に会いに行きましょうか。」

今何話だっけ？15くらい？今更王様に会って。

「いいけど・・・」

暫く出番なかったけど漸く見せどころだよ。

S i d e ・花梨

雷花は筆者に嫌われてるとしか思えないね。

このタイミングで私に変えてくるとか。

（寧ろ花梨が大好き。^{むし}）

「なんでだ？」

（後書きで会話しようか）

「了解」

出番ないって言うか私を使ってる理由が雷花のネタを思いつかないんで代わりにネタが浮かび上がりまくる私を使ってるらしいんだよね。

「おいてけぼり役からずいぶんと出世したな、お前」

すごいでしょ、えっへん。

「無い胸を張るな」

一遍死んでみる？

「いや、まだ死にたくはないな。」

「あのお、花梨さん？」

「久しぶりだね、ローブの人。」

「ロ！・・・まあ、いいですが。」

「魔法の習得もできたみたいですしそろそろ出発しないのですか？」

「つまり穀潰しはさっさと出て行ってことだね。」

「花梨はひどい扱いを受けているのか？」

むしろ逆だね。

「いえ、滅相ありませんが・・・確かに食費はすごいです。その細い体のどこに・・・」

こいつ胸のこと言ってるの？

「どう考えても違うね。」

「わかった、じゃあ明日出発させてもらうよ。」

「では、この黒い服を返しますので。」

「あ、制服か。」

「その服はみたことのない素材でできていますね。」

そんなにすごいのかね？ザクロ

「貴族でもこんなものは着れないと思うぞ。」

なんで？

「本当に珍しいというかみたこともない品だ。」

へえ……

そろそろ1章終わりにしようぜ！（後書き）

後書き

神「雷花は追い出されるように、花梨は食費のために。」

花「私は食費なんだね。」

雷「引きこもりじゃないもん！」

神「雷花を男の娘にしようっていう案も出てたんだ。」

花「いいんじゃない？」

雷「よくない。」

時空の魔女って怖くね。(前書き)

どうも、神無月です。

氷「二章だから出番頂戴ね。」

神「クーデレにしたいんだけどどんなのかわかんないからめっちゃひどくなるよ?」

氷「いいだろう!」

神「でも花梨人形作り終わってからね。」

氷「男なのに人形作るとか・・・」

前書きは氷雨ちゃんと筆者こと神無月が担当することになりました。

時空の魔女って怖くね。

S i d e . 花梨

私思ってたんだ。

「何をだ？」

私の得意属性って？

「忘れてました。」

よし、1発食らえ。

「え、やだよ。」

得意属性確かめるんでしょ・・・

「あ、なら打ってね、殴るのはやめてね。」

今回の筆者の気分は何よ・・・

「従順な竜を書きたかったらしいよ。」

趣味悪いね。

「俺の絵を書いてくれたらしいけど下手だったらしいよ。」

私もいるんだろうね？

「二人？でセットらしいね。」

いるんだね。

「ほら、打ってみるよ！」

本気で殴るよ？

「ごめんなさい。」

・・・

「ん？どした？打たないの？」

いやさ、風属性ってある？

「あるよ、炎の派生だけど」

派生とか合成とかめんどくさいんだけど、派生の説明を。

「たとえば合成なら、溶岩なんかがあるね。」

詳細は？

「火と土の合成。」

じゃあ派生は？

「派生って言うのは副産物的なものだね。」

詳細も求む。

「炎とか火が燃えると気流ができるでしょ？」

それで風ね。

「上位には嵐なんかもあるよ。」

そもそも得意魔法の基準って言うのは？

「自分に一番身近なもの。」

それはイメージしやすいから？

「そうだね。」

じゃあ、やろうと思えば全属性も操れると。

「それは無理なんだよね。」

なんで？

「そもそも全ての属性自体解ってないみたいなんだよ。」

竜は属性の数だけいるんでしょ？

「合成があるから・・・」

7種を合成するんだから・・・

「炎派生の風ともう一回炎を合成するとかあるでしょ。」

どうなるの？

「熱風だったり炎がホーミングしたり。」

怖いなそれ・・・

「あと細かく分類分け出来ないんだよね。」

熱風は風寄りだしホーミングする炎は炎寄りだね。

「それに全ての属性使うにはまず七曜を全部使えないと・・・」

私には金とかわかんないね。

「で、属性の得意はイメージだから気休め程度にしかないよ。」

なんで1属性しか使えない人たちがいるわけ？

「人つてのは思いこむと当然そうなると信じて疑わないからね。」

改めて人って愚かな生物何だね。

「おい人間。」

私はもう魔族だからねえ・・・

「確かにそうだけど魔力初期は低かったよね。」

む、・・・そうだけどさ。

「君が望む属性とかイメージが得意属性だしねえ・・・」

なら、風と炎だね。

「魔力量的には嵐だと思うけどね・・・」

魔力で変わるの？

「時・空間はわかんないけどね。」

私も使える？

「時と空間はイメージ出来ないようなものだけどねえ・・・」

イメージ出来るなら？

「君ならできそうだけど・・・」

その花にかけてみるね。

「把握した。」

よし、ライフムービー時間鑑賞かける感じでいいのか

「らいふむーびー？」

筆者の読んでる漫画で時間を高速化させるのがあるの。

「何そのチート」

使えるキャラは植物の成長を促進させることにしか使ってなかったけどね。

「才能の無駄遣いってこういう事を言うのか・・・」

よし、飛べ！

「・・・枯れないぞ？」

あるえ〜？おかしいな〜？

「実際に時間というものを経験できるような事でもないと思えないんじゃないか？」

あんたは何が使えるのよ・・・

「竜は原初の生物だから・・・自属性だけだな。」

王種って使えねえ・・・

「王種は1種類につき1匹じゃないぞ。」

え、なんで？

「その種に進化した時の卵の数だけいるから。」

まあ、1個しかない卵とか微妙だね。

「昔からいる竜は弱いんだけどな。」

進化的な意味で？

「もちろん」

さかのぼるほど弱くなるの？

「一定以上昔の龍は全属性を使えるうえに圧倒的な力を持っているぞ。」

龍？竜じゃないの？

「あまりの強さの違いから字が違っただな。」

へっ・・・

「時間を直に感じるには長い時を生きるくらいしか方法はないぞ。」

何年くらい？

「過ごした時の密度によるんだ。」

「汝は竜と会話できるのかえ？」

あ、誰か来たね。

「・・・誰でしょうか？」

「ああ、失礼僕はポフツカワと言う名の国から来たディアスシアと言う者だ。」

あれ、見た目幼いのにめっちゃお婆さんみたいな喋り方

「ディア…さんでいいかな？」

「さんはいらんよ。」

「これをロリババアというのか・・・」

「その竜よ。汝は儂が言葉を解らないと思っているかもしれんが大間違いだぞ？」

（すまん、念話じゃないと無理、この人怖い。）

このチキン竜が・・・

「で、ディアさんは何でこんな山奥に？」

「さんはいらんと言うておるのに・・・ああ、ここに来た理由は圧倒的な魔力を確認できたからな。」

（圧倒的魔力って？）

（召喚の儀じゃないか？）

（あれね。）

「それは多分私が召喚された時のものだと思います。」

「・・・召喚魔法とは違う質の魔力だと思ったんだがなあ・・・儂も遂にボケたか・・・」

（この見た目でこのしゃべり方って激しく違和感）

（同感だよ。）

「ところで汝の名は？」

「あ、花梨です。龍堂花梨。」

「ほう、名字持ちか。」

（花梨・・・普通は名字なんて教えないぞ。）

（先に言っただけだったな。）

「ならば儂も答えなければならんな。」

「え？何がですか？」

「儂の名はディアスシア・バルベラエと言う、覚えておくといい。」

（バルベラエ？どこかで聞いた気がする。）

（花梨、知っているのか？）

（ああ、ベルサイユの薔薇に響き似てたんだ。）

（花梨エ・・・）

「そついえばお主ら時間魔法と言っていたな、見せてやるぞ？」

（棚から牡丹餅？）

（おはぎって美味しいよね。）

（ザクロ・・・）

「見せてください、使ってみたいんです。」

「・・・魔法の真理を人間が知っていると驚いた・・・」

（花梨、イメージで使えるのは普通の人間は知らないんだよ。）

「花梨よ、汝は魔法の真理をどこまで知っている。」

「そう言いながら胡散臭そうなロリババアは花梨に迫り寄った。」

「おい、その王種。」

（声に出てた・・・）

（ザクロ・・・貴方のことは忘れない。）

「魔法の真理って言われても・・・合成とか派生くらい？」

「それくらいは寧ろ一般常識だ、そこから先をどこまで知っている？」

「知ってるって言うほどでもないんですがそもそも得意魔法はその人の身近にある者じゃなくて想像しやすいものが使うのが簡単ってだけですネ。」

「みなまで言うがよい」

「え？」

「まだ知っているのだろう？」

「魔法には魔力だけでなくイメージが必要ってことですか？」

「最終真理まで知っているじゃないか、本当に驚いた。」

「最終真理って。。。」

（この世界じゃ秘蔵されてることなのかね？）

（いや、俺の世界から見たら魔法技術進んでるし、少なくとも鱗を使った変り代召喚なんてのはなかった。）

「そのお前の知識に免じて儂の時空魔法を見せてやろう。」

（時空魔法？）

（時と空間の合成だな、おそらくディアは長い時を生きてるんだろ
うな。）

（にしても急展開だね。）

（そうだな。）

「花梨よ、そこに魔物がいるだろう？」

「ええ、いますね、大型のが。」

「あれを倒して見せよう。」

「あれ、とんでもなく硬いですよ。」

「戦ったことがあるのか？」

「食べようと思いました。」

「その人間とは思えない魔力量は魔物を食したのか、本当に面白いやつだ。」

（ほめられた？）

（ほめてないほめてない。）

（そう言えば言葉わからないんじゃないかなかったっけ？）

（筆者の後付けって知ってる？）

（こ都合主義ね。）

（それだ。）

「その魔物のいる座標を空間指定するとするだろうか？」

「ええ、そこまでは解ります、ギリギリ」

「そのあとその魔物の指定された空間を時間操作で座標指定された範囲を書きかえる。」

「広さを決められるわけですね。」

「無駄に広範囲に打つのも無駄でしかないからな。」

「で、そこから？」

「指定した範囲外の魔物を空間魔法で魔物そのものの座標を瞬間移動させて範囲内に入れる。」

「ええ、解ります。」

「で、空間魔法をここで発動させてその空間だけ魔法の範囲内にさせる。」

「理解できます。」

「で、そこから空間を魔物ごと押しつぶしながら魔物の時間の流れを速めてその魔物の耐性を下げる。」

「え、ちょっと待ってください。」

「何だ？」

「なんで耐性下がるんですか？」

「ああ、魔物は存在が魔力と言うか魔法の塊だから時がたつにつれて魔法を理解し始めるのだよ。」

「それなら納得できます。」

「これも一般的には秘蔵された情報なんだがな・・・」

「そうだったんですか・・・」

「で、最終的に空間を圧縮して魔物を圧殺すると。」

「堅さとか関係するんですか？」

「魔法は物理的な物の影響を受けない、これは一般常識だ、本当にお前の知識はどうなっている？」

（ザクロが中途半端な知識を教えるからあ・・・）

（いきなりディアが来るなんて普通想像できないだろ。）

（そうだね。）

「そもそも知識なんている物さえあればいいと思います。」

「まあ、そうなんだがの・・・」

「簡単に言つと場所を指定してその場所に魔物を配置、そして押しつぶすイメージだな。」

（解りやすいですね。）

（ザク口時々敬語になるよね。）

「解りやすいですね。」

「かみ砕いて説明をしてるからな。」

（じつは説明あんまりわかんなかったんだよね・・・）

（後で説明してやるよ・・・）

（ありがと。）

時空の魔女って怖くね。(後書き)

神「花梨！俺だ！結婚してくれ！！」

氷「神無月の病気が発症しましたよ・・・」

神「お前のデレの発症要因俺にするぞ。」

氷「まえがきとあとがきでしか出番がないのに始終出れないといけないとかなんて地獄。」

神「嘘だから安心しろ。」

氷「今日のキャラクター紹介！」

神「今回はタイトルにも出てるロリババ(殴グハツ」

デ「儂じゃな。」

神「ディアさんです。」

デ「略すんならフルネーム考える必要ないだろう・・・」

氷「皆植物に関する名前なんだよね・・・」

デ「わしのイメージは？」

神「転用ネタで以前書いた落書きがイメージなんだ。」

デ「設定も違うんだろ？」

氷「いちいち落書きしたキャラに設定つけるなよ・・・」

神「小説書いてられるのもその時に書いてた設定が有り余ってるからだね。」

氷「ディアスシアさんは筆者が割と気に入ってるんですね。」

神「だって転生物って基本ロリババアと会話して転生してるじゃん。」

「

デ「これは転生ものじゃないだろう？」

神「そうだけどさ・・・」

花「時空の魔女ってディアさんの肩書き？」

デ「次回の内容に関するから言えんな」

レウコスペルムム「フルネーム覚えてる人いるのかな・・・」

神「ディアもスペルも名前完璧に覚えてないんだ、俺。」

氷「筆者がその体たらくつて・・・」

ローブ「そもそも名前すらありませんよ。」

神「つけてやるよ。」

口「では？」

神「え・・・今言つの？」

氷「考えてないなんてことはないですよね？」

デ「期待させてやっぱ無しはあり得ないよな？」

花「ね？」

神「・・・何この四面楚歌」

口「名前ないんですね・・・」

デ・レ・氷・花「ジーツ」

神「さつきスペルセリフなかったよね。」

デ・レ・氷・花「ジーツ」

神「お前らしつこいよ・・・じゃあセダム・グラエカでいいか。」

セ「名前をもらえた・・・」

花「もう呼ぶこともないだろうけどね。」

氷「あ、馬鹿。」

セ「え・・・」

神「大丈夫、セダムには氷雨も召喚してもらうから。」

氷「ローブに召喚されるのなんかいやだな・・・」

デ「その発言はどうかと思うぞ。」

レ「貴方が一番失礼ですよ。」

氷「ごめん」

忘れてた世界観とか色々紹介するよ！（前書き）

デ「約2500PV達成記念！」

氷「筆者は1章のラストの方で言ってたことを忘れてたらしいので、私と、」

花「花梨でお送りします。」

氷「今回は筆者は出てこない前書きになりそうです。」

花「過去設定引っ張りださないとね！」

デ「大体約って何だ・・・」

花「実際は2400くらいなんだって。」

氷「過去設定とかそんなこと言わなくていいよ・・・私いないもん・・・」

花「そのうち来るって！」

雷「俺なんていても空気だぜ？」

氷「前書きだけで出番超えられそうな気がしてきた。」

雷「一応5000文字くらいの出番はあるんだ。」

氷「前書きは筆者の都合で300字行くことがあるのを知らないの？」

花「今250文字くらい行ってるよ。」

氷「ほらね？」

雷「本格的にやばいかも・・・」

忘れてた世界観とか色々紹介するよ！

主要キャラクター

ふじわらいが
藤原雷花

黒髪黒眼

極々普通の高校生

だと思つてたけど異世界に召喚されました。

得意魔法は雷

花「説明文これだけ。」

雷「え、少ない。」

りんどうかりん
龍堂花梨

赤髪右眼紅左目黒

右目は幼いころにぶつけて赤くなった。

極々普通の人外

その気になれば一刹那の間に3回は攻撃できる。

筆者が人形を作ったり他人にイラストを描いてもらったりしている。

得意魔法は嵐

実際にはイメージに左右されるという魔法の真理に辿りついているために時・空間除く全属性を使える万能な人外

竜のなかでも起源と言われる王種のザクロと会話ができる眼を持つ。

戦い方のスタイルとしては両手両足に炎を纏う物だったが嵐属性を習得後は脚に風を纏って空中戦もできるようになった。

便利な人外である。

氷「雷花は泣いていいわよ・・・」

雷「あ、泣いてもいい？」

花「筆者は私が大好きなんだね。」

氷「そう言えば炎と嵐の複合で炎の翼もやろうとしたみたいだよ。」

雷「藤原姓を持つ俺にその魔法欲しかったわ。」

花「私は不死じゃないから（汗）」

ストーリーに関与する人物

レウコスペルムム・コルディフォーリウム

筆者いわく名前長い。

実在する植物で偉い人は名前が長いというイメージからついた。

時属性の魔法を使う。

ぐーやとかレウスとかネタには困らない人。

3人いたローブの人B・C

完全なモブ

セダム・グラエカ（ローブA）

2章で筆者がなんとなくつけた。

意外と努力家で温和な性格。

得意属性は土

空間を使えるようになったのは本当に努力した結果。

花梨は空間を使えないことからそのことがうかがえる。

雷「なあ、俺より説明多くないか？」

花「あゝ、えゝ・・・ドンマイ！」

氷「主人公は謎のベールを纏ってるみたいでいいじゃない。」

雷「筆者は純粹に考えてないだけだろこの場合。」

花「否定できないよ。」

雷「orz」

ディアスシア・バルベラエ

時空の魔女

魔法の管理人にして悠久の時を生きてきた×××

その見た目は見る者によって姿かたちを変えるので同じ瞬間に視界に入っても同じ姿には見えない。

ぶつちゃけ鶴みたいな存在。

氷「×××って何よ？」

花「なんだか筆者は面白そうだから残してたみたい。」

雷「文字数的に大魔王とかなんかだろ。」

デ「筆者は単純だがそこまで単純じゃないだろう・・・」

花「ディアさんこんにちは」

デ「うむ」

モブキャラ

神無月

プロ語使う人、中二病が今だに抜けきらないらしい。

堇

頭いいモブキャラ

地名

ポフツカワ

名前かわいい。

もちろんこれも植物。

1人の王と3人の王姫からなる。

じつはドロドロした関係があるがそこは省く

総勢12人の兄妹がいる。

ディアスシアもここから来たようなことを言っている。

デ「ここは先代勇者がひどすぎて嫌気がさしたんだ・・・」

花「そんなにひどかったんですか？」

デ「わが軍隊を根こそぎ持って行ってなおかつそのまま投降と来たものだ。」

雷「おかげでおれが・・・」

花「大変だね。」

氷「名前不覚にも萌えた。」

山奥の小屋

正式名称召喚の間

ローブB・Cとセダムさんがいる。

セ「B・Cも名前欲しいですね。」

花「筆者が覚えられないから無理だね。」

セ「植物も無限じゃあないですしね・・・」

花「筆者の植物への知識量がまず問題だね。」

レ「レウコスペルムム・コルディフォリウムなんて普通知りませんよ。」

デ「ディアスシア・バルベラエもな。」

花「花梨とか簡単ですよ?」

雷「藤。」

氷「そもそも植物の名前ついてないんだけど。」

花「いいじゃん、氷の花とかきれいだよ。」

氷「ごめん死神しか思いつかなかった。」

花「パクリはだめだよ?」

氷「氷の竜とか作れる気がしないわ。」

花「具体例は避けてね。」

氷「この前筆者がポケモンしてたら燃えてる猿が両手両足に炎を纏う独特の戦い方をするって書いてあったらしいよ。」

花「むう・・・今は脚に風纏ってるもん!」

雷「俺は完全オリジナルだよな・・・」

花「私はシャナみたいって言われたよ・・・筆者の知り合いの3人くらいから。」

氷「炎の羽って不死で赤髪灼眼は剣士で、両手両足に炎は猿だよね。」

花「竜関係は違うもん!」

雷「竜胆りゅうたんって植物があるんだよな。」

花「竜を出すってのは筆者の中で決めてたみたい。」

雷「それは本来俺のはずだったんだよな？」

氷「私よ、残念ながら。」

花「炎と氷を合わせるとか温度差で死ねるから。」

氷「きつとブルードラゴンの何かになるのよ（汗）」

ザ「ブルードラゴンは水だぞ？」

花「ザクロの不意打ちが決まったあゝ！！！」

氷「いいでしょ！出番さえもらえないんだから！」

雷「俺へのあてつけか。」

氷「ごめんなさい。」

魔物とかいろいろ

花「魔物にはランクが決められてるんだって」

デ「以前倒して見せた大型はBランクだな。」

氷「その前にランク分けの説明をしなさいよ・・・」

デ「ああ、すまなかった、E SSSの8種類だな。」

花「めんどくさいね。」

デ「SSSだろうとEだろうと私からしたら一緒だな。」

氷「無詠唱からの全属性魔法攻撃とかノーカンだから。」

花「指を鳴らすだけで雷が落ちて凍りついて燃えて潰れて溺れるみたいな感じかな？」

デ「指を鳴らさずともその程度できるぞ。」

氷「もうやだか・・・」

花「もう時空の魔女じゃなくて災厄の魔女でしょ。」

豚

おいしい

Eランク

大きい奴

堅い、まずい、毒があると三拍子そろってる

Bランク

花梨なら素手で倒せるって怖いよね。

氷「結局どういつ分け方が説明されてないけどE SSSはさらに5段階に分けられるの。」

デ「40種類分け何ぞ学者がやることだな。」

氷「うるさい、E5 SSS1みたいな感じね。」

花「豚さんは？」

ザ「あいつはE5だな。武装すれば一般人でも5人がかりで倒せる。」

氷「そんなのを一人の上に素手で倒してたのね花梨は・・・」

デ「・・・本当に人間か？」

花「こんなに可愛い女の子はそうそういないよ!？」

ザ「自分で言うからいけないんだろ・・・」

雷「魔物との戦闘経験ゼロです。」

氷「そもそも異世界にすらいません。」

ランク

SSS1

原初が存在

祖龍などの生物が君臨している。

SSS2

龍などの存在がいる。

龍の定義はモンハンで言う古龍

SSS3

龍よりも竜がいる。

SSS4

正直な話魔王とかこころ辺のレベル。

竜も羽の生えたトカゲみたいなものしかない。

二足立で歩く竜とは違い四本脚で這いまわる

SSS5

不死性の高い生物が多い。

生命力が高いと恐ろしい

SS5

天災級の魔物クラス

SS4

大国が手を組んで総拳げでかかれば撃退出来るレベル。

SS 3

戦事国家なら国総挙げて撃退できるクラス。

SS 2

大国が手を組めば討伐出来るクラス

SS 1

戦時国家が国総挙げて討伐出来るレベル

S 5

一部の人外か小国が連合を組んで挑めば撃退できなくもないクラス

S 4

一部の人外か小国が連合を組めば討伐出来るクラス

S 3

某狩人の危険度8クラスの生物

S 2

大国の一個大隊を投入して撃退できるレベル

S 1

大国の一個大隊を投入して討伐出来るレベル

A 5

紙のサイズではない

A 4

大国の一個中隊を投入して撃退できるレベル

A 3

大国の一個中隊を投入して討伐出来るレベル

A 2

小国総挙げて撃退できるレベル

A 1

小国総挙げて撃退できるレベル

B 1

一部の魔導士小隊が撃退できるレベル

B 2

一部の魔導士小隊が討伐出来るレベル

B 3

腕の良い魔導士が撃退できるレベル

B 4

腕のいい魔導士が討伐出来るレベル

B 5

パーティを組んだ冒険者が撃退できるレベル

C 1

パーティを組んだ冒険者が討伐出来るレベル

C 2

冒険者がソロで撃退できるレベル

C 3

冒険者がソロで討伐出来るレベル

C 4

完全武装した一般人が徒党を組んで撃退できるレベル

C 5

完全武装した一般人が徒党を組んで討伐出来るレベル

D 1

完全武装した一般人が10人ほどで何とか撃退できるレベル

D 2

完全武装した一般人が10人ほどで何とか討伐出来るレベル

D 3

完全武装した一般人が10人ほどで撃退できるレベル

D 4

完全武装した一般人が10人ほどで討伐出来るレベル

D 5

武装した一般人が10人ほどで撃退できるレベル

E 1

武装した一般人が10人ほどで討伐出来るレベル

E 2

武装した一般人が5人ほどで何とか撃退できるレベル

E 3

武装した一般人が5人ほどで何とか討伐出来るレベル

E 4

武装した一般人が5人ほどで撃退できるレベル

E 5

武装した一般人が5人ほどで討伐出来るレベル

花「モンスター多いね・・・」

氷「私も嫌になったわ」

デ「学者だけで十分だと言うのに・・・」

氷「覚えて損はないけどあまり使う事もないわよね。」

デ「そうだな。」

雷「原稿増やしてることに意味があるんだろうな・・・」

花「読者は読みごたえを求めているのかねえ・・・?」

氷「私見て言っても私はわからないわよ」

花「んじゃあ次は?」

氷「これで終わりね。」

デ「汝らはいつもこんなことをしてるのか？」

花「まさか・・・」

忘れてた世界観とか色々紹介するよ！（後書き）

神「はい、どうも後書きになって戻ってくる筆者です。

魔物説明打っててリンクいらないだろこれトか思い始めました。

実際要らないんだよねえ・・・」

凍りついた雷（前書き）

氷「これ最終話のタイトルに使いなさいよ・・・」

花「イメージ的に雷花と花月が出あうんじゃないの？」

氷「それならいいけどポフツカワから山奥までどれくらいあるのよ・
・・」

デ「ポフツカワの裏山だけだなそこ」

氷「後付けって便利ねえ・・・」

雷「俺の出番復活でいいんだよな。」

神「いいえ、花梨が雷を落とすのを花月が止めるだけです。」

雷「いつになったら旅立つんだよ・・・」

神「冗談だよ。」

凍りついた雷

Side・氷雨

「よおおおおおおおおおし！！！！出番来たあああ！」

「氷雨、授業中に叫びださない。」

「すみません。」

何いきなりやってんだろ私、今までこんなことしなかったのに。

「授業終了」

「ねえ、花月なんでいきなり叫びだしたの？」

「氷雨って今までそんな叫びだしたりするような子じゃなかったでしょ？」

「そりゃあこうなるよね・・・」

「私も何が何だか分からないんだけどさ・・・」

「出番がどうのこうのって？アイドルにでも選抜された？」

「いや、氷雨は声綺麗だから声優じゃない？」

どっちでもないうえにいきなりここで叫びださないでしょそれ・・・

「いや、どっちでもないね・・・」

「なんだ・・・つまんないの。」

ところで私この二人あんまり知らないのだけど誰？

普段の私いつも自分の机で読書してるだけなのだけれど・・・

「ところで私思ったのよ、花月ってそんなおしゃべりなキャラだっけ？」

「そもそも氷雨と会話したことすらないわ。」

「なら帰れよお前ら。」

なんて会話してたら蒼い穴が足元に開いていた。

Side・雷花

今回は花梨の出番がない方向でお送りいたします。

なんだか王都の裏山で魔物が出現しなくなっただけらしい。

一部では赤髪で右眼の紅い女の子を見たと言う人がいるらしい。

あからさまに知り合いを思い浮かべたがここは異世界、あいつがいるはずがない。

王様との謁見は筆者の都合によりスルーされました。

王妃との関係がドロドロしていたとだけ言っておこう。

スペルが大活躍してた。

けど都合により割愛で。

レ「私の出番・・・」

Side・氷雨

・・・どこぞ？

「今回は白髪蒼眼ですか・・・」

私は白髪で蒼眼だから外国人のおばあさんって言われたことがあるんだよね・・・

嫌な思い出だ。

凍りついた雷（後書き）

神「結局出会いませんでしたね。」

花「私が出ない話とか久しぶり」

氷「遂に出番が・・・赤飯を炊くのよ！」

雷「俺も漸く旅立ちだからたいてやるよ！」

神「お前ら仲いいな」

デ「儂も花梨についていこうかの。」

神「真理はどっかに行つて欲しいかな。」

デ「これでどうだ？」

（審議中）

神「いいよ、それなら」

デ「よし」

雷「一体何があつたんだ・・・」

時間操る女（前書き）

デ「時空関係は儼なのかの？」

神「新キヤラ増やす意味もないしね、ただ時間なら二人今いるから。」

雷「ぐーやか・・・俺の出番かな？」

デ「そのうち時間空間の大安売り始めそうだな。」

神「長寿な生物ならあるかもよ？」

デ「空間は召喚された時のこと考えれば花梨が使えるそうだがな。」

雷「俺は？」

デ「まだあつてすらいなしい・・・」

氷「私は白が何をイメージしてるかわからないわ！」

神「白は雪で、蒼は水だね。」

氷「雪？」

神「大丈夫、使えるのは水と氷、派生条件的に氷だけだとね・・・」

雷「俺って何派生何だろう・・・」

神「一人一種族って言葉知ってる？」

デ「龍なんかによくいるな。」

花「うちのザクロは？」

ザ「一人一種族には個体名しかつけられないんだよ？」

花「レッドドラゴンは種族名か・・・」

雷「つまりどういうことだ？」

神「雷花しか使えないよってこと。」

デ「花梨なら使えるそうだぞ？」

神「ディアスシアさんも使えるそうだけどね・・・」

デ「全属性網羅してるから。」

神「あんたはチートの類たぐいだったね」

氷「永遠に続きそうなので本編に行きまゝす。」

時間操る女

Side・氷雨

おおう、召喚されてるみたいだね。

一応一通り把握したよ、いまだにここが異世界だなんて思えないけどね。

魔法とかいいながらただのマジックの可能性もあるし

いや、でも魔法（magic）だからいいのかね・・・？

細かい話あんまり覚えてないけど王都が最近勇者を召喚したらしいからこつちも召喚してみたよって話らしい。

何だよその軽いノリ・・・

勇者のお供にさせるらしいんだけど・・・

前回召喚んだ人が自由人過ぎて義と礼を重んじる勇者には合わないって話らしい・・・

勇者ってそんなにかたっ苦しいの・・・

「そう、そんな調子ですよ。」

「え、こんな適当でいいんですか・・・」

教育 みたいなこと言いながら簡単な礼儀程度でした。

つまんない

「では、魔法に移りましょうか。」

魔法は七曜だつてことは教えてもらった。

私の得意魔法は何かつて言われて真つ先に自分の名前を冠している氷と水が思い浮かんだ。

氷は水の派生だからきつと水を先に使えるようにしておかないと成功しないよね・・・

「呪文とかあるんですか？」

「ないですが雰囲気をつけるためと先代勇者が言っていたらしいです。」

勇者は代々召喚されているらしいとか。

じゃあ・・・

「私もやってみるかな・・・—E t e r n a l s n o w（永遠の雪）—」

ああ・・・小説を読んでる時からやってみたかった・・・

・・・あれ？飛ばない。

・・・めっちゃ恥ずかしいんだけど・・・

「あゝ・・・魔力の込め方から教えましょう。」

うん、本当に先に教えてほしいよ。

（1時間後）

「そこはそうじゃなくてこうです。」

なんで礼儀は適当なのに魔法はこんなに厳しいのよーっ！

「このくらいでいいでしょう。」

「よし・・・じゃあ――Absolute zero（絶対零度）！」

… 出ない

「あの・・・言葉の意味はわかりませんが大技すぎなんじゃないでしょうか？」

あゝ・・・MPが足りないのね

「じゃあ改めて――Iceicle needle（氷柱）」

出た、出たよ、一本だけ。

「あゝ・・・魔力が少ないのは前回の召喚された少女もそうでしたので・・・」

「あ、そうなんですか」

私一人だけ少ないとかねえ。。

「なぜか魔力量が2回目会った時に莫大な量に増えてましたけど・・
」

何その人！？どうやって増やしたのよ！？

「この山の奥に行くと行っていましたが・・あそこはBランクの魔物が徘徊してますしねえ・・」

魔物のランクはSSSからEまであるらしい。

本当はもっと細かいらしいけどね。

SSSはおおよそ人間が出あったら威圧だけで死ぬクラスらしい。

SSSって怖い・・

BはちょうどSSS・SS・S・A・B・C・D・Eと中心チョイ下の實力らしい普通の人じゃ勝てないけど・・

ちなみにSSSだけは1から5になるほど弱くなるらしいけどSS
Eは5から1に行くほど下がるらしい。

統一しようよ学者！

（筆者のミスです。）

まあ、SSS1は1番強いみたいな感じでE1は一番弱いみたいな感じで。

E1の生物なんてこのあたりでは多いらしい、強くてB2くらいらしい

く時間たつく

よし、氷柱くらいなら連発できるようになった。

回復量を伸ばす方法で・・・

前回の人魔力どうやって増やしたんだろう・・・

時間操る女（後書き）

どうも、神無月です。

なんていうか話続かないぜ！

氷「なんで私がこんななのよ」

神「テーマは中二だよ。」

氷「やっぱりか・・・」

デ「中二とか痛いなおまえ」

神「あんたは存在が中二設定だよ。」

花「全属性とかねえ・・・」

雷「SSSも一撃何だろ・・・何者だよ」

デ「起源にして頂点だな」

神「お前は覇龍か」
アカムトルム

そういえばタイトルは氷雨関係だと時間がすっ飛ばしまくってるからです

今日は更新が遅れてしまいましたごめんなさい。

花梨ってマスコットキャラクター？（前書き）

神「アクセス解析見てただけどさ。」

氷「何？」

神「花梨出てる話だけ200PV行くんだけど・・・氷雨が出ると80PVしかなかった。」

花「あゝ・・・ドンマイ」

氷「同情するなら出番をくれ。」

デ「儂なんて一話しか出てない・・・」

花梨ってマスコットキャラクター？

Side・雷花

「最近異常気象が起きてるみたいなんですよ・・・」

「え？なんで？」

「裏山なんですが燃え上がるわ雪は降るわで・・・」

何その地球の終わり

「それは・・・勇者として止めに行かないとな・・・」

（雷花！初の勇者みたいなセリフ！）

悪かったな、初めてで。

「では・・・移動と言っ仮定を飛ばし辿りついたという結果だけ残す。」

え、キンクリ・・・

く山奥く

まじかよ・・・

「で、この小屋は何？」

「あゝ・・・召喚の間ですね・・・」

え・・・召喚の間？

「お城にもなかったっけ？」

「正確には勇者のお供を召喚する場所です。」

「変える必要なんてあんの？」

「勇者とお供では鍛え方が違いますから・・・」

まあ・・・もともと魔王を倒すための訓練だしねえ・・・

そもそも訓練させてるやつが倒しに行きやあいいのに・・・

俺なんて余裕で負けるんだけど・・・

「この小屋では魔法使いを召喚しているのです。」

魔法使いねえ・・・

「あからさまにその魔法使いの異常気象だよね？そうだよね？」

「魔法は強いですがあんな大技を両極で打ち続けるなんて人間とは思えません・・・」

ああゝ、火と・・・氷？

「氷属性なんてあったか？」

「雷属性を使うあなたが言いますか・・・」

ん、そうだな

「氷ねえ・・・絶対零度？」

携帯獣の一撃必殺であつたよね。

「おや、スペル？」

あれ、なんかローブの人出てきた。

「あ、セダムさん」

王女がさん付けって相手どんだけ偉いんだろうね。

「そこにいるのが今代の勇者かい？」

・・・謎の威圧感が襲いかかってくる。

花梨ならこの程度何の問題もないんだろうなあ・・・

花梨の方が威圧感強いし

「はい、そうですが？」

「今代は氷属性なのですが・・・わけのわからない言葉ばかり言うてまして・・・」

なにそれ・・・

「具体的には？」

「エターナルフォースブリザードと・・・」

中二・・・

「あゝ・・・絶対零度とか？」
アブソリュートゼロ

絶対零度って一撃死するよね。

「ああ・・・そんな感じです、お分かりですか？」

「出来れば近寄りたくない類ですが・・・」

「使える魔法が一種類しかありませんが・・・」

絶対零度連発って怖いよね。

「あいすにーどるなるものらしいのですが・・・」

アイスニードル・・・氷の針・・・氷柱じゅう？

エターナルフォースブリザードはわかるけども・・・

「魔力が少量なんですよね・・・」

よくそれで魔法使い召喚の間と言えたな・・・

「空間魔法使って召喚してるんだよね？」

「はい、そうですけども。」

花梨ってマスコットキャラクター？（後書き）

雷「え、ここで終わり？」

神「筆者の適当さ知ってる？」

花「私が出ると4000文字超えることがあるんだよね？」

神「YES」

氷「もう私中二固定なのね・・・」

氷雨の中二は治らないのか？（前書き）

氷「もうやめて！！私のライフは0よ！」

神「H・K・氷雨は中二なのか？も考えたけど・・・。」

花「私の別の方向でお気に入りなんだね・・・。」

神「もちろんさー。」

雷「出番よこせや」

デ「一回しか出てないぞ、儂。」

ぐ「もう出番ないんだろうな・・・。」

ザ「花梨は強化済みだ。」

花「時間飛ばすなよ・・・。」

神「ニコニコ見てて思った。」

雷「何を？」

神「このラノベ面白そうだなあ…と。」

雷「何の動画見てたんだよ」

神「動画じゃなくて市場」

ぐ「え」

神「輝夜魔王式って名前なんだけど・・・。」

雷「それ10巻まで出てるじゃねえ力・・・。」

神「まじか・・・。」

花「ところでこれを読んでる皆さんにお知らせです。」

神「このタイミングで!？」

花「筆者は書きかけの小説を昨日間違えて自フォルダごと全て消し

去ってしまいましたとさ。」

神「うん・・・読者のみなさんごめんなさい。」

雷「ところで男の娘萌えに目覚めた筆者よ」

花「男の娘萌えトか帰れ」

神「かわいければいいだろ。」

花「秀吉とか？」

神「・・・あれは男じゃないだろう」

花「筆者は特殊性癖なの？」

神「ロリババア好きは正常だよね？男の娘萌えはともかく」

花「ロリだけじゃ不満？」

神「大好きです。」

デ「儂の出してきた理由は・・・」

神「萌え要素を増やすために出したんだぜ？」

デ「・・・時空って意外と小説で動かすにくいんだよな」

神「まだ日と月の良かったかもしれないけども・・・」

氷「私がプリンセスウィンデネとかうつわよ？」

花「じゃあロイアルフレア」

ぐ「・・・サテライトヒマワリ？」

デ「賢者の石」

神「おい、最後のは強すぎないか？」

デ「きつと儂は全属性網羅しておるはずだろう・・・」

神「じゃとか言わせたくなかった。」

花「ああ、おかしいと思ってたよ。」

神「リヴァイアサンってかっこいいよね。」

花「チート設定満載。」

神「他人の作品に足突っ込むのはマナー違反だからあんまり言えなかつたり。」

雷「月火水木金土日・・・神無月イ・・・」

神「掘り返すなよ。」

花「雷花嫌がらせばかりするから出番ないんだよ。主人公なのに。」

雷「泣いていい？俺泣いていい？」

神「今回は花梨強化の話だけしかないから前書きが本編なんだ。」

氷「私の名前を使っておいてなにそれ。」

神「消える前は氷雨使ってたけど花梨が恋しくなった。」

花「え・・・ありがと（ポツ）」

氷「キャラに何言わせてるんだろう作者・・・」

神「うるさいな・・・夢にまで花梨出てきたぞ三日くらい前。」
花「花梨人形綿無くて作れなかったくせに・・・」
神「リアルで腸使えば？って言われた時本気でビビった。」
雷「ウミネコ読者はこれだから怖いんだ・・・」
神「さくたろうとかトラウマだろ」

氷雨の中二は治らないのか？

Side・花梨

前書き長い・・・

どうも、花梨です。

脚から風魔法で加速装置的なの作ったよ。

背中から炎の翼も見た目いいけど魔力量と操作方法が難しかった。

後不死鳥が周りを飛んでるよ。

不死鳥は触ると即死概念搭載

イメージ次第で何でもできる魔法って怖い・・・

不死鳥だから死なない、っていうか一回発動したら永遠に発動しっぱなし。

・私の魔力を持っていくわけでもないんだけど何で消えないんだろ・・・

ときどき見かける女の子が氷魔法で相殺したはずなのに気付いたらそこに現れたし。

ん・・・

あぶそりゅーとぜろってなに？

（絶対零度だな。）

一撃必殺！

（・・・まあいいが）

氷雨の中ニは治らないのか？（後書き）

筆者の戯言。

前書き長いです。

1000文字超えてました。

・・・データ消えたので復元（再ダウン）を行うので週1更新にしようかな・・・と

スランプとかでなく消えたときのショックが大きいです。

ザクロの異世界生活（前書き）

神「疑問に思ってたんだが・・・」

雷「何？」

神「リヴァイアサンって強いなって・・・」

雷「引き摺ってんなよ」

神「じゃあさ・・・俺のポケモンの本気のチームだけど個体値もつと粘ればよかった・・・」

雷「知るか・・・」

氷「少し気になるわね。数値見せて。」

神「ん。下に出す。」

テツカニン Lv54 ようき

HP： 30／31

攻撃： 30／31

防御： 23／24

特攻： 21／24

特防： 0／1

すば： 31

サザンドラ Lv68 てれや

HP： 31

攻撃： 23／24

防御： 6

特攻： 31

特防： 13／14

すば： 9／10

メタグロス Lv69 いじっぱり

グライオン Lv52 いじっぱり
 HP: 22 / 23
 攻撃: 31
 防御: 7 / 8
 特攻: 28 / 29
 特防: 10 / 11
 すば: 5 / 6

ラムパルド Lv52 いじっぱり
 HP: 1 / 2
 攻撃: 31
 防御: 15 / 16
 特攻: 15 / 18
 特防: 18 / 19
 すば: 8

ハッサム Lv54 きまぐれ
 HP: 12 / 13
 攻撃: 31
 防御: 6 / 7
 特攻: 28
 特防: 31
 すば: 6 / 7

HP: 17 / 18
 攻撃: 30
 防御: 7 / 8
 特攻: 25
 特防: 11 / 12
 すば: 21 / 22

雷「・・・テッカニンが3Vの可能性があるんだな？」

神「いや、そこはジャツジさんに聞いてあるからHPはUで攻撃素早さV」

氷「グライオン防御高いんだから個体値粘りなさいよ・・・」

雷「テッカニンだけ無駄に粘ったのか？」

神「そのテッカニンは知り合いに頼みこんで作ってもらったツチニンを俺が努力知振っただけのやつ。」

雷「自分で粘ることはしないのか？」

神「HP攻撃防御Vのノコッチならいるよ？」

雷「激しく不安になるノコッチだな。」

神「コンセプト違うから使わないけど」

雷「お前のコンセプトって何よ？」

神「ズバリ砂パ」

氷「バンギラス派？カバルドン派？」

神「この前GTSで怠ける遺伝のHP防御特防Vのヒポポタスもらったんだ。」

雷「カバルドンか？」

神「いや、攻撃特防Vのバンギです。」

雷「ヒポポタスどうした？」

神「努力値振るのめんどいしレベル上げもだるい。」

雷「なんの為のビクティニだよ・・・」

氷「筆者はビクティニゲット済みです。」

神「ヒポポタスが能力上げるのは修羅場なんだよ・・・」

花「プルリルか電気石かガマガルか・・・確かにつらいね。」

神「育てやだと下手した時技消えるし。」

氷「あちゃ・・・」

雷「ガブリアスいるのか？」

神「エビふりゃーの方が好き。」

花「だめだよ逆鱗持ち攻撃素早さVのフカマルがこの前ボックスで

眠ってた。」

雷「個体値出さずだけ出して育てないのか・・・」

神「攻撃特攻素早さVのイーブイをブースターに進化させてしまいましたが・・・」

花「なんで？」

雷「原因お前だろ。多分」

神「花梨作ったあたりから晴れパと霰パと雨パを同時に存在させようとしたんだ。」

雷「雨が俺で晴れが花梨で霰が氷雨？」

神「オフコース！」

氷「今度はsnowstorm（吹雪）あたりでも習得してくるか。必中だし」

雷「フルフリール（雷の直撃）でも習得するか。」

神「お前はフランス語派なのか」

雷「エクレール（雷）とどっちがいいか・・・」

神「フルフルって名前の雷の悪魔がソロモンにいたよね。」

花「まさか・・・某怪物狩人のあれはそれか・・・」

ザクロの異世界生活

Side・ザクロ

「今回は俺だけだぜ？」

最後の怪物狩人は俺の伏線だと受け取ってください。

現在進行形でハンターのみなさんが俺を倒そうと絶賛努力中です。

なんて言うか雷弱点な俺はどうしようか・・・

こいつらみんな電気系統武器だよ・・・

狙ってるな？狙ってるよな・・・これ

正直勝てる気がしないんだが・・・

俺も王種として頑張ってこれたんだがなあ・・・

こいつら相当強いな。

あれか・・・割と昔他のやつから聞いたG級か・・・

しかし・・・動きに無駄がない

これじゃあ龍とかも斃したことありそうだな・・・

俺にはちと荷が重いか・・・

戦略撤退するに限る。

「Entkommen Sie nicht!」

お前ら何言っつかわかんねえよ!

くザクロ自宅(っっていうか洞窟)く

うん、安心と安全の我が家

ちよ、出血多量で死にそう。。。

とりあえず寝ると回復する便利仕様利用つと

一体どうなってるんだろうねこの世界

と、おもっていたわけですが・・・

足元に穴があきました。

え、回復しきってない

異世界トリップなんて割と普通にやっってるやついるから懂れてたんだよね・・・

こんなじょうきょうでなければ!

ザクロの異世界生活（後書き）

神「週一なのにこの短い文章・・・」

雷「前書きで2000字行くから削ってたんだよね？」

神「ポケモン・・・現に恐ろしき」

花「筆者は学校でポケットモンスターハンターなんてカオスな事考えてたんだよね。」

氷「王座を狙う没落貴族！ 詳細コイキング10頭討伐くみたいな？」

神「うん、まんまそれなんだけどね。」

雷「しっかし短すぎだろ」

神「本当はザクロが獲物を狩ったりもあつたんだけどさ・・・」

ザ「筆者の表現力のせいだな」

神「異世界に行ってから花梨に会うまでもあつたんだけどさ・・・」

雷「一週間何してた。」

神「カラカラ厳選」

ザ「死ね」

花梨との出会い（前書き）

花「前回の引き摺り？」

神「じゃあ急遽で筆者と花梨の出会いにする？」

雷「あゝ・・・廃スペックにはどうしてなったんだろっな。」

神「新衣装考えたけどまんまだったから没った」

花「パクリはよくないよね」

雷「ポケモンから引つ張ってきたらしい。」

氷「ReBURST・・・eの上のやつってドイツとかスペインだっけ？わかんないけど」

花梨との出会い

Side・ザクロ

異世界トリップされたわけだが・・・

なんで周りにさっきまで戦ってたハンターみたいな人がいるんだよ・
・

夢落ちか？

・・・とりあえず戦うか

走りだそうとした瞬間落とし穴に落ちました；；

俺ダッセ

ハンター？のみなさんが私のことを寄ってたかってフルボッコにしてくきました。

あ、目の前が・・・

くくくくくくくくくくく

気付いたらなんか臭い部屋にいました。

殺す気はないのか・・・

一体何がしたかったんだろうな

普通に餌もくれるし・・・

仲間から聞いた話だといけどりされた後解剖されるらしいんだが・

消化構造をのぞいてみたいのか？

それとも養殖して戦争に駆り出すのか・・・

できれば後者がいいな死にたくないし

そんなこんなで一週間ほど・・・

く竜の部屋（仮）く

・・・一体何がしたいんだろう

ここのやつら何言ってるかわかんないし

何がしたいかも分かんないし

いつまでこんなかで待機してればいいんだよ

そういえばRPGって固定キャラずっと立ってるけどそのうちクモの巣とか張られてそうだよな。

（筆者が組み体操のピラミッドの練習をした時緑色の小さい蜘蛛に巣を作られそうになりました。）

ボタン！TEEレッツTEE

え、何その効果音初めて聞いた

とりあえずだるいので寝たふり

ん？

一人？だけ言葉がわかるやつがいるな・・・

仲間が遂に捕まったか？

期待

結論

おにゃのこでした。

・・・黒地に赤のラインが入った高級そうなインナー・・・

貴族の娘か・・・？

それにしてもスカート短いな

前いた世界ではスカートとズボンを組み合わせたファッションがはやってた気がする。。。

確かに腰回りは守れそうだな

男と女で露出度が違うのに堅さが同じっていう不思議・・・

「.?」

花梨との出会い（後書き）

どうも、筆者です。

こんなに伸ばしてこの量しかない、要領の悪さ！

ちなみに前回投稿した当日に書いた分ですこれ全部。

時間が・・・受験が・・・

では、また次回。

終焉と共に在る者（前書き）

神「中二っぽいよね。このタイトル」

花「ディアスシアとデデレシア似てるって言うか・・・紛らわしい。

」

タ「五時まで任務かよ！」

神「まだうろついてないから・・・」

デ「めんどくさい奴だ・・・」

タ「頭文字あんたとかぶってんだよ」

終焉と共に在る者

Side・花梨

筆者がものすごく急いで執筆してるよ！

さて、私はどうしたらいいんだろう・・・

なんと筆者はストーリーが頭から抜け落ちていた！

最近抜け毛が目立ち始めたんだよねb y筆者

結局私の新コスチューム（あの風に加護がついてるやつ）も全く使う気配ないし。

一体筆者は何なんだろうね？

Side・氷雨

あれ？ものすごく久しぶりの出番

どうも、氷雨花月です。

私のこと覚えてる人いるのかな。

確か設定では白髪蒼眼だったはず・・・

今思うとブル。アイズ・ホワイト。ラゴン！？

伏字意味あつたかなこれ

私の出番来たけどすることないのよね・・・

「氷雨さん喋ってください。」

「あ、ごめんなさいセダムさん。」

「勇者様もう来てますし。」

「え？もう来てるの？」

「あゝ・・・俺だ、本当に日本人なのか？白髪蒼眼って」

「白髪は生まれつきで蒼眼は遺伝です。」

「ぶつけたとかじゃないのか・・・」

「？」

「いや、こつちの話。」

「そうですか」

何だろうこの勇者・・・

胡散臭い

いや、これはひどすぎるか

苦勞人みたいな感じがする

「あゝ・・・どうも、はじめまして、ユウシャサマ」

他人と話すのってなんか怖いわ

セダムさん？あの人とは別だよ

人だと思っ てないし

「さらっとけなされた気がするんですが」

うわ、鋭い。

この人不審者だよねぱつと見

「さて、えゝと？氷雨・・・花月だっけ？よろしく」

様をつけなさい！って言うてみたくなつた。

いや、言わないけど

終焉と共に在る者（後書き）

小説が進まない！

筆者です。

実はこれ2 3週間放置してたのはテストだったり右目腫れたりしてたんです。

受験生ですからテストは大事。

腫れてたのは事故

ちよつと推敲してきます。

すいません、話がもうグダグダすぎてちよつと1からやり直してきます。

いや、今までの話見返すと誤字脱字に矛盾など……本当に申し訳ない……

←規定数突破のための文字稼ぎ。無視してかまいません。

[illegible]

すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいません
すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいません
すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいません

ヤンデレではございません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0670w/>

凍りついた雷

2011年11月26日17時52分発行